514
155

32.11. 6

574-158

帝國圖書館藏

湖處子　宮崎八百吉譯

揚州十日記
嘉定屠城紀略

東京　廣文館藏版

大正
12. 8. 11
寄贈

宮崎寅男氏寄贈本

序

揚州十日記、嘉定屠城紀略の兩書は俱に共に明季稗史初編の一である。該の所謂明季稗史なるものは烈皇小識、聖安本紀、行在陽秋、嘉定屠城紀略、幸存錄、續幸存錄求野錄、也是錄、江南聞見錄、粵游見聞、賜姓始末、兩廣紀略、東明聞見錄、青燐屑吳耿尙孔四王合傳、揚州十日記の十六編がそれである。尙その續編が有つてそれには明季遺聞、明季實錄、蜀難叙略、紀福王之立、東林事略、東林紀事本末の六篇が收められて居る。該初編中東明聞見錄、行在陽秋、粵游見聞、也是錄、求野錄、揚州十日記、嘉定屠城紀略、吳耿尙孔四王合傳の八編は之を合冊とし、八家集と題して今を距ること約百餘年前乃ち我が文政年間に舶載せられて、然も尙這の揚州十日記、嘉定屠城紀略の二書はその當時紀州藩の儒者齋藤南溟の手に依り、原文に反點(かへりてん)を附し飜刻せられゐることゆへ、我が讀書家には夙にその內容が知悉されてゐる筈である。

該八家集中の吳耿尙孔四王合傳乃ち吳三桂、耿仲明、尙可喜、孔有德四人の合傳を除き、爾餘の七篇は悉く皆明末における弘光、隆武、永曆三朝の事蹟を記したもので併せてまた明朝の遺臣等が王室の顚覆を痛歎の餘に成りしものたることは、之を讀む人の齊しく肯定する所である。蓋し清兵の捷に乘じ江南一帶の地を屠るや、恰も人を殺すこと草の如く到る處淫虐鹵掠を肆ままにしその慘毒人の目を蔽はしむるものがあつた。夫れ故正史は諱みてその詳細を筆にしなかつたのであるが、該八家集は何等忌憚することなく赤裸々にその悲慘の事蹟を直書したものである。就中揚州十日記の如き勢ひ破竹の如き清兵が明末の忠臣史可法の孤守せる揚州城を蟻付陷落せる十日間の實驗記であつて、著者王秀楚の如き重圍の內に在つて身自からその難に遭ひ、困頓狼狽しつつ辛うしてその餘喘を保ち得たりし者、その記述せる所覺えず人をして膚に粟を生ぜしむるものがある。その嘉定屠城紀略は著者の姓名は明記されてゐないが、之れ亦夫の揚州十日記の著者がその土着の人であつた如くに嘉定縣の住人であつて、揚

州陷落し南京守りを失するに及び、侯峒曾、黄淳耀等の學究儒服を焚いて起ち、義を守り節に死せし事蹟を目睹耳聞の儘に記述したもので、之れ亦亡國の慘禍を遺憾なく發揮せるものである。

由來支那民族卽ち滿漢兩人種共にマキアヴエリズムの術策に富み、乃至モハメダニズムの殘忍性の横溢せることは世界の歴史家の齊しく驚異せる所であるが、之を要するに、揚州十日記並に嘉定屠城紀略は約三世紀以前の支那革命の途上に於ける一幅の慘禍圖であつて、前清時代に於ける漢民族をして滅滿興漢の思想を鼓吹せしむるに與つて力あつたものである。明の永明王の晩年頃は我が日本では德川幕府が鎖國的長夜の夢を貪れる眞最中であつたが、歐洲においては、恰も英國の共和政治が破壞せられ革命兒クロンウエルのプロテクトルから王政復古して、チャールス二世が卽位した歳である。世界の治亂興亡の跡を考へるといふことは、爲政家の忽かせにすべからざると共に、此種の稗史が支那民族の研究上に好箇の資料であることは余の固く信ぜる所

である。今や歐洲大戰以來俄然として世界の耳目は慢性的に無政府狀態を演じつつある隣彊支那大陸の上に集中せられつつある。此際余が這の二篇を世に公にするの微忱たる必ずや大方諸士の諒とせらるるものが有らう。

譯者故宮崎湖處子氏とは多年來文筆上の交誼があつた。特に此の二篇は余が委囑に成りし比較的氏が晩年の飜譯物である。今之を刊行するに方り一言を附記せる次第である。

大正十二年七月

青山の僑居に於て

小寺謙吉識す

例言

一、揚州十日記、嘉定屠城紀略の二編は明末の稗史である。その中揚州十日記は江都（揚州府治江都縣）生れの王秀楚なる讀書人が、自から遭難せる所を有りの儘に記述せるものであつて、嘉定屠城紀略も亦同じく清兵の重圍に陷りし嘉定城内の青衿の徒であつたことは、之を讀むものの一目瞭然たる所のみならず、兩編共に、演義體の記述なるも古來比較的精確なる歴史の參考書として學者の推稱に値せるものである。

一、揚州は人も識る如く禹貢九州の一で今の江蘇省の地、書經の禹貢に『淮海ハ惟レ揚州』といへるは此地のことで、疏ふに『江南ノ氣躁勁、厥ノ性輕揚ナリ、故曰ニ揚州一』とあり、古來美人の產地を以て有名である。嘉定城は今の上海附近なる嘉定縣治の所在地で、民國政府の江蘇省滬海道に屬して居る。

一、本書の譯述は十中八九勉めて之を直譯體としたのであるが、文中往々にして字義

の不明なる箇所、若くは行文の妥當ならざる箇所は故らに之を意譯體として文字の明確を期したことも一再に止まらないのとを豫め茲に告白して讀者の諒察を乞ふのである

揚州十日記

揚州十日記

江都　王秀楚　記

乙酉の夏四月十四日（西歴一七〇五年明の福王即位二年）督鎮史可法（註一）は白洋河の守を失ひしより蹌踉（よろめきながら）として揚州に奔り、城を閉ぢ敵を禦ぎて二十四日に至つた。城未だ破れざるの以前禁門の内には各々守兵が居て、揚姓の將校が之を率ゐて城の要處々々へは夫々吏卒が恭置（布置といふに同じ）せられてゐた。予が住宅は新城（揚州には新舊兩城が有つた）の東に在つたが二人の兵卒が宿泊してゐた。左右の隣家も亦同樣であつた。彼等の踐踏（肆ままに室内に闖入して物を漁ざるをいふ）至らざる所なく供給（兵卒の掠奪を緩和する爲めの賄賂あり）日に千餘錢を費さし、將に繼ぐ能はざらむとする故、已むことを得ず近隣相共に謀りて主者（隊長）の爲めに觴（さかづき）を設け、且又予は謬（いつは）つて恭敬を爲し（心なき世辭追從をいふこと）酬好（交際）漸く洽ねきを得た。主者喜んで卒を誡めて稍々遠く去らしめた。主者は音律を

喜び琵琶を善くした。仍て名妓を得て軍暇を娛まむと欲するに意があつた。一夕予を邀へて滿飲し歡を縱ままにせむことを擬りしに、忽ち督鎭（乃ち史可法）から寸紙（紙片に書いた訓令）が到來したので、彼は之を覽て色を變じ遽かに城に登つたので、予も亦衆と共に散會したのであつた。

越えて二十五日の朝早くに督鎭から牌諭（掲示の諭告）が出た。其の中に『一人之に當り（督鎭一人國難に當るの意）百姓を累さず』の語があつて、見る者聞く者感泣せざるは莫つた。道路又傳へて巡撫の軍小捷を得たことを報じたので、人々手を額に加へて慶んだ。午餘に予の姻戚某が興平伯（高傑）（註二）の逃兵を避けて瓜州から態々やつて來た。予が婦は久しく別れてゐたに緣つて相見て噓唏を禁ずることが可能なかつた。然るに予は不圖敵の大兵が城内に闖入したことを一度ならず二度ならず耳にしたので、急に寓宅を出でて諸れを人に詢ひたるが、或人は曰く靖南侯（黃得功）（註三）の援兵が來たのであると。城上を旋觀せば守兵尙嚴整であつたので較々意を安んじ、再び市上に至れば人言洶々として被髮跣足の者

塵に繼いで至つた。試みに之を問へば心急ぎ口喘ぎて對ふる所を知らなかつた。忽ち數十騎があつて北よりして南し、奔騰狼狽して勢ひ波濤の湧くが如くなるが中に一人を擁しつつ去つた。之れ別人ならず督鎮史可法であつた。蓋し督鎮は東城に奔らむとせるも外兵逼り近づいて出づることができないで、更に南關に奔らむとして此道を過れるのであつた。是の時始めて敵兵の城に入つたことが疑の無いことを知つた。突如一騎の南より北に向て繮を撤して緩歩しつつ面を仰いて哀號し、馬前の二卒轡首馬の轡や首に依々として捨て去るに忍びざる如きものがあつた。今に至つて其の人猶然目に在るも恨らくはその姓名が判然しなかつた。騎稍々遠く去りしとき、守城の兵丁紛々として下り竄れ、冑を棄て戈を抛ち幷に首を碎き脛を折る者が有つた、城櫓を廻視すれば已に一空であつた。是より先督鎮は城狹くして礮を展べることが可能ないので、城の梁に板を取りつけ前をば城徑に置き後を民屋に接し、展礮の餘地を作つて安置に便ならしめむとしたのであつたが、工未だ畢らないで敵兵の弧を採つて先登せる者白刃も

て亂下し、守城の兵民は相互に擁擠して前路逼塞せるを以て、皆置く所の木板上に奔り上り匍匐し板援して民屋に及ぶを得た。然るに新に置く所の木板は固定してゐないで、之に足を托すれば傾き倒れて人の轉ぶこと宛ながら落葉の如く、死する者十中の八九であつた。其民屋に及びし者も足瓦裂を踏み或は劍戟相擊つの聲の如く、或は又雨雹挾彈の聲の如く、鐘鼓の聲雜然として四もに響くことが絶えなかつた。屋中の人は皆惶駭きて出でて爲す所を知らなかつた。而して堂室の内外を深く寢闥に至るまで皆な守城の兵民共の屋に緣て下れる者が惶々として隙を覓めて潛匿し、主人がそれを呵止することができないのであつた。外廂の比屋は皆な戸を閉ぢて人煙屏息して了つた。

予が廳の後は城牆に面したれば、牕隙中より城上を窺ひ見れば兵南を循つて西し、步武嚴整で淋雨にも少しも紊れない所から予は之を節制あるの師かしらと思ふて心稍安じたのであつたが、忽ち門を叩くの聲急なるを聞けば、則ち隣人相約して共に王師を迎ふべく案を設け香を焚き敢て抗せざるを示さむとすと云ふ。予は事の已に濟らざる

此の如きを知れるも然も亦衆議に拂る能はずして姑らく連應して唯々と對へ、服色を改めつつ領を引いて待つてゐたが良々久うして來なかつた。そこで予は復た後窗に往つて城上を窺へば則ち隊伍稍疎で或は行き或は止まりつつ俄かにして婦女を擁して其間に雜り行くものがあつて、その服飾は皆な揚州の風俗であつたので、予は始めて大ひに駭き還つて婦に語つて曰く、敵兵城に入り倘しも不測の事があつたならば予爾は當さに自裁すべしと、婦曰く諾と。且つ正金若干を汝に付して收藏せしむ、我輩復た人世に生るるを想ふを休めよと涕泣交々下り、盡く有る所の金を取り出して予に交付した。是に於て平予は趨り出でて望めば北來の數騎皆な轡を按じて徐行し、王師に遇ひ迎ふる者皆な首を俯して語る所あるが如きであつた。是の時人々自から爲めに守りて往來が通ぜず、相違ること咫尺なるも而かも聲息聞ゆることなく、稍々近づくに迨んで始めて此の數騎は戸毎に金を索むるものなることを知つた。然も其の意は頗る奢らないのであつて、稍にても得る所があれば卽ち置いて問はない。或は應ぜざる者が

あつて刀を採つて相向ふと雖其の刀は尙ほ人に及ばなかつた。原註、後ちに知りぬ捐金萬兩相獻じたることを、而して卒かに斃さるるものあるは揚人之を導ける也 次で予が門に及び一騎予を指し後騎を呼んで曰く我が爲に此の藍衣の者を詮索せよと、後騎方に轡を捨てて馬を下らむとせるときに予は逸早くも飛び遁れたので、後騎は遂に余を棄てて去つた。予心に計つて曰く、我が粗服は隣人に類したるに、何ぞ獨り隣人を舍いて予を欲したるやと。須臾にして予が弟至り予が兄も亦至つた。因て相共に謀つて曰く、此の居は左右皆富賈であるので彼等も亦富賈をもつて我を視んとするので之を奈何せむと。遂に急に僻逕から伯兄の家に一家族を擧げて身を托することとし、弟は婦女を扶け雨を冒して先づ仲兄に往つた。仲兄の宅は何家墳の後に在つて、肘腋は皆貧窶の居であつた。而も予は獨り自家に留つて動靜を觀てゐた。俄にして伯兄が來つて曰く、中衢は血が濺いで危險千萬である此に留まつて何をか待つや、伯仲生死一處ならは亦恨みなけむと、そこで予は遂に先人の神主を奉じて兄と偕に仲兄の宅に趨いた。當時兩兄、一弟、一嫂、一姪、及び一婦、一子、二外姨

一内弟、皆同じく仲兄の家に避難した。日がすこし暮れかかつてきて、多勢の兵卒が人を殺すの聲が門外に透徹した。因つて一家内中屋上に登つて暫く避けてゐた。雨が尤も甚かつたので數人共に一枚の毛氈を擁したるが絲髮が皆濕ひ透ふた。而も門外哀痛の聲は耳を悚て魄を懾れしめつつ延いて夜に至つて靜まつた。仍で簷を扳て屋に下り火を敲きて食を炊いた。城中の四圍は火の起ること近きものは十餘處、遠きものは其數を知らなかつた。赤光相映じて霞電の如し燐烞の聲耳に轟きて絶えず隱々としてゐた。又擊楚の聲も熾んに聞えて哀風凄切、慘として名狀すべからざるものがあつたので、飯は熱したなれども一家中相顧みて驚き且つ憂へ、涙下つて箸を下すことが出來ず、また一謀をも設くることも出來なかつた（如何なる工夫もなかつたとの意）予が婦は前なる金を取つて之を碎き分ちて四と爲し、兄弟各々其の一を藏め髻、履、衣、帶の内に隱し持つた。婦又一の破衲、舊履を覓めて爲めに分ち着換へ訖りて遂に目を張りて旦に達した（一睡もしなかつたとの意）是の夜や鳥あつて空中に飛廻つてゐて、その鳴くこと笙篁の聲の如く、又小兒

の啼哭する聲の如く、人の首の上に在つて遠からざる如くであつた。諸を人に詢ねしに皆之を聞きたりと謂つた。

二十六日之を頃くして火勢は稍々息み、天も亦漸く明けた。乃ち復た高きに乘り屋に升りて躲れ避けゐたりしに、既に數人の兵卒が天溝の内に伏してゐた。忽ち東廂の一人が墻を乘り越えむとして一卒が刄を持して之に隨ひ、追躡飛ふが如きであつたが予が衆を望見し遂に追ふ所を舍てて予の所に向ふて奔り來つた。予は遑迫て屋を下りて逃竄れ、兄之に繼ぎ弟又之に繼いだ、走ること約百步にして止まつたのであつたが此れより遂に婦や子と相失し復た其の生死を知らなかつた。諸黠卒等避け匿るるものの多からむことを恐れ、衆人を紿くに安民符を交付すれば又誅むることなけむと言ふた。匿れたる者競ひ出でて之に從ひ共に集まるもの五六十人に至つて婦女の參るものその半ばであつた。時に兄余に謂つて曰く、我が落々たる四人或は悍卒に遇はば終に免るることが出來ないゆへ、若かず彼の大群に投ぜむには、勢ひ衆ければ則ち避け易

く、不幸にして生死萬一のあるも相聚まれば恨みなき也と。時に各自の方寸思慮と分別といふに同じ已に亂れて生を救ふの良策が出でないで共に曰く唯々と、相與に之れに就いた。而して之を領する者は三個の滿人の兵卒であつた。予が兄弟の所持金を捜索して皆之を盡くし、獨り予のみを遺して未だ捜らなかつた。忽にして來りつつあつた婦人の内に予を呼ぶ者があつた。之を見れば乃余が友朱書兄の二妾であつたので、予は急に遮ぎり止めた、二妾皆散髪露肉、足深く泥中に入りて脛を沒し、一妾一女を抱いてゐたが、兵卒共が鞭つて之を泥中に擲たしめ旋で卽ち驅り走つた。一卒は刀を提げて前導し一卒は戈を横へて後逐し、一卒は中に居て或は左し或は右し以て逃逸を防ぎつつ無慮數十人宛から牛羊を驅る如きであつた。稍にても進まざれば卽ち捶撻を加へ或は卽ち之を殺した。而して諸の婦女には長索をもつて頸を繫ぐこと累々として貫珠の如く、一歩に一跌して泥土身に遍く、地に滿つるものは皆嬰兒であつて或は馬蹄に襯み或は人足に藉れ、肝腦地に塗れて泣く聲野に盈ち盈ちしてゐた。行いて一溝一池を過ぐれば堆

尸貯積せられて手足相枕し、血は碧水に入つて赭く化して五色を現じ、塘は之が爲に平らかなるに至つた。

此の如くにして予等一家族は夫の滿卒三人に護れつつ一の宅に至た。之れ乃ち本の廷尉永言姚公の居であつた。其の後門から直に入つた。屋宇が深邃くて處々に屍が積み重ねられてゐたので、自分達は此所が死所だと心に思つてゐたのであつたが、逶迤つて前戸に達して街に出で復た一宅に至つた。ここは西商喬承望の室で卽ち夫の三卒の巢穴であつた。門に入れば已に一卒が居て數人の婦女を拘へ、箱籠を揀拾り來つて綵緞反物山の如くであつたが、三卒の至るを見て大ひに笑ひ、卽ち予輩數十人を驅つて後廳に至り、其内の婦人だけを旁室に留置いた。旁室の中には二箇の几と三箇の裁縫臺が擱かれてあつて、一人の中年增の婦人が裁縫しつつあつた。該婦は本郡の者であつて、濃抹麗粧の上に鮮衣華飾てゐて予等を顧みつつ指揮言笑し、欣然として得色があるのみならず、好物に遇ふ毎に卽ち卒に向つて乞ひ取りつつ媚態を曲盡して毫も耻

としなつた。一卒嘗て人に謂つて曰く我輩高麗を征せし時婦女を擄にすること數萬人而も一人の節を失ふものが無かつた。何ぞ堂々たる中國にして恥なき此に至るや、嗚呼是れ中國の亂るる所以なりと。三卒婦女を將ゐて盡く濕衣を解かしめ、表より裏に至り頂より踵に至つた。並に製衣の婦人をして修短を相し、寬窄を量り、易ふるに鮮新なるを以てせしめた。而るに諸の婦女卒等の威逼已まざるに因て遂に裸體に至つて掩蓋ふことが出來ず、差澁して死せむと欲するものあるは言を待たざる所である。衣を換え畢るや卒等は乃ち諸婦女を擁しつつ酒を飲み肉を食ひ、爲さざる所なくして秋毫も廉恥を顧みないのであつた。忽ち一卒刀を横へ躍り起ちて疾呼し、後に向て曰く蠻子奴僕の輩來ると、近前眼前と同じには數人既に縛せられて吾が兄も亦その中に與つてゐた。仲兄曰く勢ひ已に此に至る、夫れ復た何をか言はむやと、急に予が手を持て前み、予が弟も亦予に隨ふた。是の時執へられたる男子は共に五十餘人であつた。刀を提げて一呼すれば魂魄皆喪ひ、一人の敢て動く者が無かつた。予は伯兄に隨ひ廳を出でて外

面の人を殺すの狀を見れば、衆皆次第によつて命を待つてゐた。予が初念も亦就縛を甘じてゐたが、忽にして心動きて神助あるが如きを感じ、身を潛めて一たび遁れて復び後廳に至つたのをば、五十餘人は一人も之を知るものが莫かつた。廳後の宅の西房には尙ほ諸老婦が殘存しゐて、躲避することが出來難いによつて、穿ちて後面に至るに盡く駝馬（駄馬と同じ）を收しつあつて又踰え走ることが可能ない。心愈急にして遂に俯して駝馬の腹下に就き、駝馬の腹下を歷數し匍匐して出た。若し駝馬を驚かして馬稍一たび足を擧ぐれば卽ち身は泥と化せむのみ。又た宅數層を歷たるも皆路なく、唯だ傍に巷ありて後門に通じてゐたのであつたが、而かもその巷門には長鐵釘の錮鎖せるものがあつた。そこで予は復た後巷より前に至り、前堂に人を殺すの聲を聞き愈々惶怖して策なく、左側を回顧すれば厨中に四人の男子が居た、蓋し亦執へられて庖を治むるの人等であつた。予はその中に收め入れられむことを懇求し、司火、掌汲の役に配し倖に或は苟免するあらむことを希ひしに、四人は峻拒して曰く、我等四人は點呼して

役せらるる者である。若し再び點檢して增入する所あらば、必ず詐ありと疑はれて禍必ず我等に及ばむと。而も予は哀求して已まざりしかば、乃ち更に大ひに怒りて予を執へて外に赴かむとした。予は乃ち出でて心は益々急であつた。視れば階前に架があり架上には甕が有つて此屋を去ることが遠くなかつた。乃ち架を援て上り、手方に甕に及べば身は既に傾き仆れた。蓋し甕は中虛であつたので、予が力を用ふることが猛烈であつた爲めであつた。仍りて急に趨つて巷門に旁ひ、兩手に錐尖端ある鐵を捧げて搖撼百度したが終に能く動く莫く、擊つに石を以てすれば則ち響が庭に達して覺られむことを恐れたので、已むを得ず復た搖撼を繰返へし、指破れ血流れて錐忽ち動きて錐は已に掌中に在つた。因りて急に門扉門錠を擊ば扉は木槿であつて雨濡ひ膨脹してその堅塞錐に倍してゐた。予迫ること甚しく但だ力めて扉を取るも之を取り除くことが出來ずして而も門樞忽ち折れ、扉傾き垣頽れ聲雷震の如くであつた。予急に身を聳やかして飛び越えたのであつたが。亦力の何邊より來りしかを知らなかつた。疾く後門を趨り

て出づれば外は卽ち城脚城壁の麓であつた。時に兵騎充斥して前進することが不能ず。卽ち喬が宅の左隣の後門から身を挨して入りしに、凡そ避くべき程の處は皆人があつて必らず容ることを肯んじなかつた。後門より前門に至ることが凡そ五たびであつたが皆是の如くであつた。直に大門に至れば既に通衢に臨み、兵丁往來して絡繹として絶えなかつた。人は以て危地と爲して之を棄てたのであるが、予は乃ち急に入つて一卓を得たが、而も卓顚れて頂を仰いでゐた。因つて柱に緣つて之に登り身を屈めて之に匿れた。喘息が方さに定つてから方さに牆を隔てて吾が弟の哀號の聲を聞き、又た刀を擧げて切り擊つの聲を聞いたが、約そ三たび擊つて遂に寂まつたのである。されど少間あつて復た仲兄の哀懇を聞いた。曰く、吾に金あり、家の穴藏の中に在り、我を放たば取り献ぜむと。一擊して復た寂然と聲が無つた。予時に神已に離舍て心焚膏の如く眼枯れて涙なく腸結んで斷えんと欲し、復た自ら主たらざる魂身に添はずとの意の境に在つた。旋ち一卒があつて一人の婦人を挾みて直に入つて此榻に宿らむとした。婦肯ざりし

も之を強ゐて後ち可ゆるし、而もその婦の曰く、此地市に近く身を居く可からずと。予幾んど免れざらむとした。頃くして卒は仍ほ婦人を挾んで去つた。その室には屏の仰げるがあつた。蓆もて之を爲せるに似て人に勝えないのであつたが、然も之に縁れば以て梁に及ぶべきであつた。予兩手を以て梁を撚ぢ、條を行いて上り、足を駝梁に托すれば、下に席蔽があつて中の暗黑きこと漆の如くあつた。仍ほ兵の至るあつて予を以て上りさぐつた、是れ空虛にして人其上に在るなきを料りしを知つたのである。予此に於て乎始めて日を竟ふるまで兵に遭はざることを得た。然れどもその下において及されしもの又た幾何人なりしやを知らなかつた。街道に數騎の過ぐる毎に必ず數十の男婦があつて、哀號してその後へに隨ふてゐた。此の日雨らずと雖亦日色無く旦暮を知らなかつた。之を久うして軍騎稍やく疎にして左右に惟だ人聲の悲泣するを聞いた。思ふに吾が兄弟は已にその半ばを傷めた上に、伯兄も亦存亡を卜知することが可能なかつた。予が婦弟が子何處に在ることを知らない、之を縱跡して或は一たび見る

ことを得んと欲し、仍て梁に附きて徐ろに下り、足を躡めて前街に至れば、街中には人の首級相枕藉し、而も天暝くしてその誰たるを辨ずることなく、屍に俯して遍く呼べと應ずる者が更に無いのであつた。遙に南首南面を見れば數多の炬火蜂擁して來つたので、予は急に之を避け、郭城郭に循ふて走れば、積屍歩を礙げ數ば跌きて數ば起ちつつ、驚く所ある毎に卽ち地に仆て僵尸の如くにして、稍〻久うして小路に達するを得た。路人昏夜に互に相觸れて相驚駭した。大街上火を擧げ出火の照耀宛から白日の如くで酉の刻から亥の刻に亘りて方さに兄の家に及んだ。而も家門閉ぢたれば敢て遽かに擊叩かず、俄に婦人の聲せるを聞くに、吾が嫂たることを知つたので、始めて輕く擊ちしに門に應ずるものは予が婦であつた。大兄は既に先ちて返つてゐて、吾が婦と子とは俱に在つた。予は伯兄と與に哭泣したのであつたが、然も猶ほ未だ仲兄と季弟の殺されたることを告げなかつた。嫂は之を予に詢ひしも予は依違して曖昧の返事のみしてゐた。予は婦に何を以て免れしやと詢ひしに婦の曰く、卒の追逐せるに當りて子

先づ奔り衆人之に繼ぎて獨り我を遺した。我は彭兒を抱いて屋下に投じたるに死するを得なかつた。我が妹も跌づきて足を傷きて亦臥してゐた。卒我等二人を持して一室に至るに屋中には男婦幾十人のものが皆魚貫珠數繋ぎにせられたるこさして縛られてゐた。因て卒は我を諸婦に殘して曰く、之を看守して逸れしむる勿れといひて刀を持して出て行つた。又た一卒入り來つて、吾が妹を劫かしつつ去つた。久うして卒の至るを見ざりしかば予は遂に諸婦を紿いて出て往つた。出づれは卽ち洪嫗に遇ひ相携へて故の處に至つた故に幸に免れ得たのである云々と。洪嫗は仲兄の內親であつた。婦はまた予に免れし所以を問ひしを以て、予は告ぐるに故を以てして相哭泣することが良々久しかつた。洪嫗は宿飯炊きの飯を携へて相勸めたるも哽咽びて下すことが出來なかつた。外は復た四面火起り勢ひ昨夕よりも猛烈であつた。潛かに戶外に出でしに田中は橫屍砌に交はり喘息の猶ほ微かに存するものがあつた。遙かに何家の墳中を見れば樹木陰森として哭聲籟を成しつつあつた。或は父の子を呼び或は夫の妻を覓むるのであつた。呱呱の聲

は草畔溪間比々皆是れで慘として聞くに忍びなかつた。回て洪が宅に至れば予が婦は死を覓めむと欲したのであつたが、予が終夜與に語つてその間を得なかつたので、東方が白かつた夜があけはなれた

二十七日婦の避難所を問ふた。婦は予を引いて委曲て一柩の後に至つた。そこには古瓦や荒磚が狼藉してゐた久しく人跡を絶つの處であつた。予は亂草中に蹲まりて子を柩上に置き覆ふに蘆席を以てし、婦は傴みてその前に居り、我は曲りて後に附してゐた。首を揚ぐれは頂露はれ、足を展ぶれば踵見はるるを以て、微かに氣息を出しつつ手足を拘めて一裏となつてゐた。魂少しく定まると共に殺聲逼り至り、刀環響く處愴呼亂起し、聲を齊うして命を乞ふ者或は數十人或は百餘人。一卒の至るに遇へば南人其多寡を論せず皆首を垂れ匍伏し、頸を引いて刄を引け敢て一人の逃るる者とては無いのである。紛々たる子女に至つては百口交々啼いて哀鳴地を動かせることは言ふまでも無いことである。午後に至り積屍山の如く殺掠更に甚しいものがあつた。幸ひ

に晩に至つて予等逡巡しつつ走り出た。彭兒は柩上に酣臥しつつ朝より暮に至て啼かず言はず、亦食をも欲しない、唯だ喝する時飲を欲せば瓦片を取つて溝水を掬して口を潤せば乃ち睡り去るのであつた。仍て呼び醒まし、之を抱いて與に去つた。そこへ洪嫗も亦至つて玆に始めて吾が嫂も亦劫掠し去られたるを知つた。吾が姪(即ち嫂の女子)は襁褓に在つたが竟にその所在を失ふた、嗚呼々々痛ましい哉。甫(はじめ)の二日に兄嫂弟姪の四人を一齊に喪ふたのであつた。相與に臼中の餘米を覓めたるに得ることが出來なかつた遂に伯兄と股を枕とし飢を忍んで旦に達した。是の夜予が婦又もや死を覓めて幾んど斃れたるを洪嫗に賴りて僅かに救免せられたのであつた。

廿八日予は伯兄に謂て曰く、今日は誰の死するやを知らないのであるが、吾が兄にして幸に恙(つゝが)なくむば、乞ふ彭兒と與に殘喘を保たれよと。兄は爲めに涙を垂れて慰藉是れ勉めつつあつたが、遂に袂を分ちて他處に逃れたのである。洪嫗予が婦に謂て曰く、我昨日柜中(溝渠の中)に匿れ終日貼然(やすらか)であつた、當さに子と易(かは)るべく子は此に避けられ

よと婦は堅く欲しなかつた。仍ほ昨日の如く柩の後に匿れたのであつた。未だ幾くならざるに數賊入りて柩を破つて嫗を劫かし去り、捶擊百端したのであつたが、卒に一人をも供出しなかつた（他人の所在を白狀せぬこと）ので、予は頗る之を德とした。少間あつて兵の來ること益々多くして、予が避くる所に及べるもの前後踵を接したのであつた。然れどもその或るものは一たび屋後に至つて柩を望みて去つたのである。忽然十數の卒あつて恫喝しつつ來つたのであつたが、その勢ひ甚だ凶しく俄に一人の柩前に至つて長竿を以て予が足を搠ふを見た。予驚いて立ち出づれば乃ち揚州人の彼等の爲に嚮導せるもので、予はその面を熟知せるもその姓名を忘却せる者であつた。予は之に向ひて憐みを乞ふたところ、彼は且つ金を索めた。献ずるに金を以てして始めて予を釋したのであつたが、尙便宜爾ぢの婦をも出せといつたが、その頭だちし者が出でて諸卒に語つて曰く姑く之を舍けとここに於て乎諸卒は散じ去つた。驚きの喘が未だ定まらない中に忽ち一紅衣の少年が長刀を操つて直に予が傍に抵り鋒を擧げて相ひ向ふた、献ずる

に又金を以てしたのであつたが、彼れは復た更に予が婦を索めた。婦時は姙娠方に九月であつて、地に死伏して起たなかつた。予紿いて曰く婦は臨月に近く、加ふるに昨屋に上りて跌き落ち、孕之が爲に壞れて萬々生くる能はないので安んぞ起來することが出來やうぞと、紅衣者之を信じない。因て腹を啓いて之を視し、兼て驗するに先に塗りたる血の袴を以てしたりければ遂に顧みずして去つた。之に携へられしもの一少婦、一幼兒、一小兒であつたが小兒は母を呼んで食を索めたるに、卒怒つて一擊しければ腦碎けて立ろに死んだ。仍て少婦と幼女との二人を拉し來つた。

予謂へらく此地の人逕は已に熟し（人皆此路を熟知せるの意）て身を存することが不可能であるゆへ當さに善地を易へて之に處るべしと。而も婦は堅く自盡せむと欲するので、予も亦惶迫して自から主たることなく。（心常軌を逸せるの意）兩人共に遂に出でて並びに梁に縊れたのであつたが、忽ち項下の兩繩一時に斷ちて俱に共に地に跌き倒れたのであつた。而も足未だ起つに及はずして而も兵又た門に盈ち々々し、直ちに堂上に趨り未だ兩廊を過ぐる

に暇あらざるに予と婦は急ぎ奔りて門外に逃れ、一草房中に遁れしに、房中は悉く村間の婦女であつて、予が婦のみを留めて予を卻けたのである。予は急いで南首の草房中に奔つた。その草堆積して屋に連つてゐた（屋根裏に届いてゐたとの意）予はその巔に登り首を俯して伏し匿れ復た亂草を以て其の上に置いた。自ら以爲らく患ひなしと。須臾に一卒が有つて一躍して上り來り、長矛を以てその下を搠つたので、予は草間より出でて命を乞ひ、復た献ずるに金を以てした。卒草中を搜りて更に數人を得たのであつたが、皆献ずる處があつて免れた。兵既に去て數人亦草間に潜入した。予はその中を窺ひたるに方卓數張あつて外圍は皆草でその内廓然として虛しく、二三十人を容るべきであつた予強いてその内に這入つて自ら計を得たりと謂ふた。意はざりき敗垣半腰より忽ち崩れ、一穴の中外洞然として已に兵の爲に窺ひ見る所とならむとは、兵は乃ち穴外より長矛を以て直に刺したので、其の前に當るものは大創を被らざる無く、予が股も亦傷ついた。而も前なる者は悉く倒れ拔けて出た。予は復た婦の所に至るに、婦は衆婦と

一緒に皆積薪の間に伏し、血を以て體に塗り、糞を以て髪を綴り、煙灰を以て面に飾り、形宛から鬼蜮（蜮魅に通ず鬼と同じ）の如くにして鑒別するに只だ聲を以てするのみであつた。予は衆婦に乞ひて草底に入ることを得て衆婦は相擁してその上に伏した。予は氣を閉ぢて敢て動かず幾んど悶絶せむとするとき、婦は竹筒を以て予が口に授け、その口を啣みてその端を上に出さしめ、氣正に達して僅かに死せざるを得た。戸外には一卒がゐて一時に二人を手殺した。而かもその事が甚だ怪しく筆も能く載することが出來ないのである。草中の諸婦戰慄せざるはなかつた。忽ち哀聲大ひに擧れば兵已に室に入り復た大歩して出で去つて、旋顧ることをしなかつた。天漸く黑れたれば諸婦予を起して始めて出でしめたのであつたが、草中に流汗雨の如くであつた。夕に至りて復た婦と共に予が宅に歸つたのであつたが、洪老洪嫗共に内にゐた。伯兄も亦來りて云ふやう、是の日劫かされて負擔し去られ、償ふに千錢を以てしたるに、乃ち令旗（保護の命令旗）を附して放置せられたが、途中亂屍山疊し血流れて渠をなせりと。又た聞く滿將王爺なる

者照陽の李の宅に居り、錢數萬を以て日に難民に給しつつあつて、其の黨の人を殺すを往々勸阻（勸告して阻止すること）して全活する所多かりしと。是の夜悲咽の餘昏々として睡り去つた。次日は則ち二十九日である。

廿五日から此日に至つて既に五日である。私かに或は薄赦（兵禍の薄らぐこと）せらるべきを幸（ねがひ）しに、又た紛々として洗城（洗ふが如く城中の住民を索めて餘蘗なからしむるの意）の說を傳へたので、城中の殘喘（生殘者）死を冒し城に縋（すが）りて逃れ去る者大半であつた。舊と有し官溝は壅塞して流を通ずること能はざりしが、是に至つて坦途の如きであつた。（逃竄者充滿せるの意）然れども亦此を以て反つて其の鋒に罹るの慘を見た。城外に亡命せる者城中に在りしを利とし、伴を結びて夜る官溝に入つて盤詰（かゞみかゞ）みてその金銀（鋒滴に罹りし者の衣帶につけたる金銀の謂ひ）を搜（さゞ）れるを敢て誰何するの人も無かつた。予等念ふに險を踰えて逃るることも出來ず、伯兄も亦予の爲に獨り去るに忍びなかつたのであつたが、延いて平旦に至つてその念（城外に逃避の念）遂に止んだ。而も原との避難所は留まる可からざるを知り、予が婦も孕むの故を以て屢々全きを獲たるを以て、遂

に獨り予を以て池畔の深草中に匿し、婦は彭兒と其の上を裹(つつ)み臥した。數卒の至るあつて爲に劫出されしもの再び、皆少しく賂を献じて去らしめた。繼いで一狠卒(很戾なる兵卒)が來た、鼠頭鷹眼的其狀貌が頗る兇惡らしかつた。彼れは予が婦を劫かし去らむと欲した。婦は偃蹇(はらはい)して前語を以て之に告げしに(前の兵卒の言つた通りの口實)聽かないで、逼つて起立せしめむとしたが、婦は地下に旋轉(たしまろひ)つつ死すとも肯て起たなかつた。卒刀を擧げて亂打し、流血衣裳に濺いで表裏漬透(浸透と同じ)した。是より先婦は予を戒めて曰く、倘し不幸に遇はば吾必ず死せむ、幸に夫婦の故を以て哀を乞ひ併せて子を累はす勿れと。故に予は知らざる眞似してゐた。予亦謂へらく婦は將に死せむとすと、而も惡卒は仍ほ之を捨てず婦が髮を將(もつ)て臂に周らすこと數匝にして横さまに拖(ひい)て去りつつ怒打毒打し、田陌より深巷に至ること一箭多地(約四五十歩の地)環曲(かくり)て大街に出で、行くこと數歩毎に必ず擊つこと數數下つた。突如數騎の過ぐるに遇ひたるに其の中の一人該卒と滿語(滿州語の應對)すること數句、遂に予が婦を捨て去つたので、婦は始めて匍匐して返へるを得た。大哭一番その

身に完膚が無かつた。忽ち又た烈火四もに起つた。何家墳の前後には草葺の家が多いので立刻に灰燼と化した。然もその寸壌の隙地があつて一二隠れて網を漏れたものは火の爲めに一たび逼まられ、奔竄して自ら出でざるは莫く、出づれば即ち害せられて百に一も免るる者が莫つた。然も亦戸を閉ぢて焚死せる者が數口から百口に至り、一室の中正に積骨の多少を辨じない程であつた。大約此際避くべきの所がなく、亦避くることが出來ず、縱令ひ避くとも敵一たび之を犯さば金なければ死し、金ある者も亦死するのであつた。惟だ路傍に露出して屍骸と雜處せば、生死反つて未だ知る可からずである生くるの望あるの意予は婦並に子と塚後に往きて臥してゐたが、銘々首には泥ぬり足には塗ぬりて、殆んど人の形ち無きに至つた。時に火勢愈熾んにして、墓地の喬木を燒き、光り電灼の如く、聲山崩の如く、風勢怒號、赤日慘澹として之が爲に光り無く、目前に無數の夜叉鬼が千百の地獄の人を驅り殺すを見るが如く、驚悸の餘り時々昏瞶となつた。蓋し既に此身の已に人世の間に在るを知らざるの有樣であつた。驟かに足聲

の響きと慘呼の心に震ふを聞き首を回して牆畔を看れば則ち伯兄獲へられて正さに一卒と相持してゐたのであつたが、兄は力めて大ひに撇ふて脱するを得た。卒遂に趕せ去つた。此卒は卽ち前日吾が婦を劫かして復た捨てた者であつた。彼は凡そ半晌ばかり至ら莫つたのであつたが予が心は搖々たりであつた。伯兄忽ち走り來つた、赤身被髪卒の爲に逼られ已むことを得ずして予に向ひ金を索めて命を救はむとした。予は僅にその一錠を存するのみであつたが、出して以て卒に献じた。而も卒の怒ること甚しく、刀を擧げて兄を擊ちしかば、兄は地上に輾轉して流血滿身であつた。時に彭兒卒を拉へ、涕泣して免さんことを求めた時に年五歳卒兒が衣を以て刀の血を拭ひ、再び擊ちて兄は將に死せむとした。旋いで予が髪を拉して金を索め、刀背もて亂打して已まなかつた。予は金の盡きたるを訴へて曰く、必しも金を欲せば卽ち甘じて死せむのみ、他物ならば可なりと。卒予が髪を牽きて洪が宅に至つた。予が婦の衣物の兩甕の中に置きたるを階下に倒し覆へし、盡く發いてその取るに供した。凡そ金珠の類は要めざる

なく、而も衣服は好きを擇んで取つた。兒が項に銀鎖あるを見て忽ち刀を將て割いて取り去つた。去る時予を顧みて曰く、吾儕を殺さざるも、自ら人ありて儕を殺さむと予は後に前なる洗城の說の既に確實なるを知つて必死を覺悟したのであつた。因て兒を宅に置き婦と共に急に出でて兄を看たるに前後の頂皆傷を被むること深さ八寸許り胸前は更に烈しかつた。予兩人之を扶けて洪が宅に至りて之を問へば、亦痛楚の身に在るを知らないで、忽ち瞶く忽ち甦がへつたのである。安置し畢りて予等夫婦は復た墳處に至りて躲れ避けたのであつた。隣人も亦俱に亂叢の中に臥した。忽ち人語を作すものがあつて曰く、明日城を洗はば必殺一盡城中のものを殘りなく居るの意せむ、當さに汝の婦を棄てて我と同に走るべしと。婦も亦余に行かむことを勸めた。余は伯兄の危きに垂んとするを念へば豈捨て去るに忍びんや。又前に恃みし所は猶ほ餘金ありしを以てである。料るに萬々生くる能はじと、一たび痛んで氣絕し良久うして蘇へつた。火も亦漸く滅し遙かに喊聲を聞くことが三たびであつた、往來するの兵丁も漸く少れであつた。予が婦は

兒を抱きて糞窖（くそ、は）の中に坐し、洪嫗も亦集つて相依つてゐた。數卒が有つて四五人の婦人を擄へてゐたが、その老ひたるもの二人は悲泣し、少きもの二人は嬉笑すること自若であつた。後に卒がありて追ひ來つて婦を奪はむして相奮擊した。內の一卒滿語を以て之を勸解したれば、忽ち一卒少婦を將（もつ）て負ふて樹下に至つて對合し、餘の二婦も亦汚辱を被つたのであつた。老婦は哭泣して免れむことを求めたが、他の三少婦は毫も恥としなかつた。十數人互に奸淫を爲して後ち追ひ來りし二卒に交與（わたし）したのであつた。而して其の中の一少婦は既に起ち走ることが出來なかつた。予は認めて焦氏の媳（よめ）たることを知つた。其の家の平日爲す所は應さに此に至れるなるべしと（因果應報の意）驚駭の下また歎息に勝へなかつた。

忽ち一人の紅衣佩劒し、滿帽にして皂靴（くろくつ）なる者を見た。年は三十に及ばす姿容俊爽にして、黃衣背甲して貌亦魁梧たる一人の卒を隨從せしめてゐて、その後に揚州人が四五人之に跟隨してゐた。紅衣の人予を熟視して曰く、爾を視るに他の儕輩中の如き

でない、何等の人なる乎を實言せよ、予念ふに時に窮措大を以て免るるを獲たる者があり、措大を以て立ろに斃るる者が有るを以て敢て實を吐かず、詞を飾りて以て告げた。復た諸婦子を指してその誰なる乎を問ふたので、告ぐるに實を以てした。紅衣の人曰く、明日王爺（統師の皇族）の命を下して刀を封ぜん（殺掠を禁ずるの意）汝等生くることを得むと。隨人に命じて衣裳幾件及び金一錠を交付せしめ、且つ問ふて曰く、汝等幾日食はざりし乎かと予答ふるに五日を以てした。命ずらく我に跟て來れと、予は婦と且つ信し且つ疑ひ而も敢て行かない譯にいかなかつた。一宅に至れば蓄ふる所甚だ豐富であつて魚米充盈してゐた。一婦人に向ふて曰く、倆好々的此の四人を待遇せよと、予と別れ去つた。時に日既に暮れた。予が內弟（妻の弟）卒の爲に劫め去られその存亡を知ることが出來ないで婦は特に之を傷んでゐた。少時あつて老嫗魚飯を搬出して予等に食はしめた。該宅は洪の居と遠くないので、予はその魚飯を取て予が兄に食はしめたのであつたが、兄の喉は最早咽とが出來ずして、數箸にして止んだ。予は兄の爲に髮を拭き血を洗ひつつ、心

は刀もて割くが如くであつた（悲痛の極たいふ）而も是の日刀を封ずるの語を聞き衆心稍々定まつた。明日は五月朔日であつた。勢ひ甚だ烈しからずと雖、然れども、未だ嘗て殺掠を行はざる莫かつた。同時に富豪大室は方さに且つ捜括して餘すなく、子女十餘歳より起つて槍掠殆んど遺類なかつた。是の日興平伯復た揚城に入り來つたのであつたが而かも寸絲粒米も虎口に入り盡して、蕭條たる殘破は伯を奉迎し難いのであつた。

初二日傳ふらく、府、道、州、縣には已に官吏を置き安民牌を執つて遍く百姓を諭して驚懼する毋らしめ、又寺院の僧人を諭して積屍を焚化（火葬に附することせしめた。而かも寺院中に藏匿せる婦女も亦少からずであつた。焚屍を査して簿に載せし數は總て八十餘萬であつた。其の井に落ち川に投じ、門を閉ぢて焚け、及び縊れたる者は之に與らないのであつた。攜（たづさ）へられたものも亦同じく之れに與らないのである。

初三日は示を出して放賑（施米のことを行つた。予は洪嫗と僧に缺口關に至つて米を領（うけ）つた、米は卽ち督鎭（乃史可法）儲ふる所の軍糧であつて、邱陵の如くに積み重ねた數千擔の米が

片時の間に蕩然として空しくなつた。往返の負戴者倶に焦頭爛額臂脛傷折して刀痕滿面なる、宛然燭涙の行を成せるが如くであつた。米を搶るの際は親友と雖相顧みずして強者は去つて復た來り、老弱と重傷を被むる者とは日を終るも一升の米粒をだに之を得ることが出來なかつた。

初四日天晴れ烈日蒸燻して屍氣人を董べた。前後左右處々燒焚、煙は結んで霧の如く腥氣數十里にきこえた。是の日予は棉と人骨とを燒いて灰と成し以て兄の瘡を療せむとした。兄涙を垂れて之を領いたのみで聲を出すことが不可能であつた。

初五日幽僻の地に避難の城民が稍々歸來し、相逢ふて各唯涙下りて一語を出すものが莫つた。予等五人は稍々甦するを得たるも、終に居宅の内に居るを敢てせず、晨起早食して卽ち出でて野畔に處り、其の粧飾は一に前日の如くであつた。蓋し往來の打糧者草賊數十輩を下らないで、戈を操らないまでも、各々杖槌もて恐嚇して人の財物を詐ば、毎日杖下に斃るる者があり。その一たび婦女に遇ふや、仍ほ肆ままに攜へ劫か

し、殆んどそれ清兵なるか、鎭兵なるか、亂民なるかを知らないのであつた。是の日伯兄は傷重く刀瘡迸裂した爲めに遂に死した。傷ましひ哉痛み言ふ可からずである。憶ふに予や初め難を被むりし時は兄弟嫂姪姉子の親共に八人であつたが、今僅にその三人を存するのみであつた。而も內弟外姨は此の數に論(いら)ないのである。四月廿五日に起り五月五日に止まつたのであるが、其の間皆身自から歷たる所、目親しく睹たる所であつて、故に之を漫記すること此の如しである。而も亦遠處の風聞は毫も之に載せないのである。後の人幸に太平の世に生れ、無事の樂を享ける、自ら一味(すこし)の暴殄(からきめ)に遇ふこと を修省經驗しないものにして之を閱せば當さに警め惕るべき耳。

〔註一〕史可法　揚州十日記を讀まむと欲する者は、豫め本篇の主人公とも謂つ可き揚州當時の守將史可法の人と爲りを知悉するの要がある。史可法字は憲之、大興藉祥府の人。崇禎元年の進士、推官（節度觀察兩使の僚屬）より身を起し、明の毅宗の朝累遷して兵部尙書大學士と爲つた。李自成京師を陷れ福王由崧位に卽くに及び、可法を召して高弘圖等と共に閣に入つて事を辨ぜしめた。已にして自から請ふて師を揚州に督し以て清の師の南下を扼した。清の攝政多衮書を可法に致して禍福を陳べた。可法之に答へて曰く逆賊李自成未

だ天誅に伏せず、土を西秦陝西地方に捲き方さに報復を圖る。之れ獨り本朝の不俱戴天の仇のみならず、抑も貴國も亦惡を除いて未だ盡さざるの憂あり、願くは同仇の誼を固くし共に逆賊自成の頭を梟せむと。

乙酉（弘光元年）四月清兵掩至して揚州城を圍み明の降將李遇春清の宗室豫王の檄を持して城下に至て可法を招致せしめた。可法陴（ひめがき）に登て大ひに之を罵つた。遇春曰く公の忠義は中華の齊しく識る所而かも朝に信ぜられずば死するも益なからむ、宜しく節を清朝に屈して名を成すに如かずと、可法怒て矢を發して之を射たが遇春走り免れた。

須臾にして豫王復た土民をして書を持し濠に入つて守者を呼んで入り見えむことを求めしめた。可法健卒を繩梯子で下ろしてその書を併せて使者を水に投ぜしめた。豫王愈々可法を生致せむと欲し諸軍を戒めて城に近づいて攻むる莫らしめ、復た人を遣はし書を持して至らしめたのであつたが、可法は之を啓かずして焚いた。是に於て乎豫王可法の終に屈す可からざるを知つて軍を麾いて急に攻めしめ、七日にして城遂に陷つた。是より先可法は預め死を期し書を作つて母と妻とに寄せて亡後のことを遺言し、また子が無いので當時の副將史德威（或は曰く莊子固）を彼れの後繼たらしめ、且曰く吾れ死せば高皇帝の陵側に葬れと。更に又威德に囑しく曰く城陷れば吾が首を斬れと威德纔かに之を諾した。已にして城の一隅火起り清の士卒殺到したので可法類を引いて威德に向ふたけれども、威德は介錯するに忍びなかつた。可法乃ち刀を拔いて自刎した。威德參將許謹と共に之を抱持し敵兵を避けた。流血淋漓として氣息未だ絕えなかつた。威德等之を擁して城を出でて小東門に及んで大兵に遇ふて威德及び許謹等は皆討死した。可法大兵に語つて曰く我は史閣部であ

る。宜しく汝等が兵主に見えしむべしと、因て遂に豫王に見えた。豫王可法の爲に丁寧に瘡を裹ましめ之を勞ひて曰く、先生の忠義既に成る、請ふ我が爲に江南を收拾せよと。可法曰く我れ此に來る祇だ一死を索むる耳。王曰く君夫の洪承疇を見ず平降れば則ち富貴と。可法笑ふて曰く爾が國の承疇を待つ豈能く我が先帝に過んや、彼れ先帝の厚恩を受けて死せず、其の爾が國に不忠なるや明けし、我れ詎ぞ肯て其の爲す所に效はむやと。豫王その將宜爾頓なる者に命じて之をその營中に伴はしめて勸說すること三日、可法竟に從はないで豫王は淚を揮ふて之を斬らしめたのである。

可法は生れながらにして他の群童に異る所があつた。その母方さに娠み文天祥其の室に入ると夢みて生れたといふ傳說がある。幼時より親に事へて至孝その門閭に旌表せられたことがあつた。可法が來つて揚州の督鎭たること幾んど一年、行くに蓋を張らず、食に味を重ねず、夏は箑(扇)せず、冬は裘せず、小冠窄衣にして部卒と雜處して平然としてゐた。年四十を過ぎて子が無かつた。その妻爲めに妾を置かむと欲した。可法曰く王事方さに殷んであるゆへ敢て兒女の私に戀々たるべきの時でないと言つて之を劫けたので竟に一生子を有たなかつた。

軍中で或る時除夜に値つたので當さに封印すべかりしに、南北の文檄交々至つたので手づから批答して辰より酉に至つた。その上に又將士に來月分の糧銀を分給し、夜三更に至つて事務尙畢らないで軍吏に謂つて曰く。今夕は除夜であるゆへ少量の酒を索めて飲みたいものだと、酒未だ至らざるに復た軍吏を呼びて之に謂つて曰く。禮賢館の諸秀才と共飲すべき筈であるが、夜が更けて却て迷惑かも知れないで、宜しく酒資を賚

らして之を分餽すべしと、軍吏命を領して已に往つた後で彼れは酒を命して獨酌したのであつたが、庖人が黍肉は已に士を饗し盡して餘す所なき由を聽いて只だ少量の鹽豉を索めて酒を佐けた。可法は素と善く飲み斗酒尚辭せざるの慨があつたが、愈飲て愈恭しく所謂る酒に亂れざるの人であつた。然も軍に至るより飲を絶つてあつたが此の夜は滿酌數十杯にして先帝を思ふて涙泫然として下つた。彼はまた衣を解いて寢に就かないことが已に七箇月であつたが、事珍らしくも當夜は微醺の餘頗る寛ろいで几に隱れて臥した。將に且ならむとした時に將士並に有司等皆軍門の外に集まりたるに門未だ啓かずして之を怪むものの如きであつた。知府任民育曰く、相公此の夕また得易からず之を驚かす勿れと、且つ皷人を戒めて更に四皷を擊たしめた。須臾にして可法は眠りから覺むれば天已に明けてゐた。大ひに驚き且つ怒つて曰く、誰か敢て我が軍法を破る者ぞ縛し來つて速かに之を斬るべしと。諸將士跪いて彼を拜して曰く、相公久しく軍中に勞苦し始めて一夕の暇を得たので相驚かすに忍びず故に皷聲を亂して以て待つ此れ知府任君の意なりと。可法意始めて解けて曰く、奈何ぞ私愛を以て公法を變ぜむやと、乃ち急に盥漱して門を啓きて文武臣と僧に北向遙賀し、將士皆賀詞を陳した、而して任知府は更に前んで罪を請ふた。そこで始めて皷人を赦したが爾來可法は復た几に隱れて臥すことが一回もなかつた。」

可法の執へられ屈せずして死するや、揚州の士民文天祥の再來を以て彼を追慕崇拜し、その遺す所の袍笏を郡城の梅花嶺に瘞め廟を建てて之を奉祀し且つ忠靖と諡した。清の乾隆帝更に忠正公と追諡した。

可法詩文に巧みに兼て草書を善くした。彼の眞筆は今尚一字優に千金に値してゐる。彼の著に有史忠正集が

ある。

〔註二〕高傑（興平伯）　高傑は米脂の人、初め李自成部下の流賊であつた。賊中彼を綽名して翻山鷂といふてゐた。蓋しその驚悍鷂（はやぶさ）の如であつたからである。終に自成の妻刑氏と通し後ち刑氏を竊んで明に降り戰功を積みて官總兵に至つた。李自成京師を陷るるに及び傑南に走り福王に投じ興平伯に封ぜられた。福王清兵の南下を防禦すべく鎮を淮上に設くるや、諸將皆揚州を得むと欲し傑先づ該地に嚮ふた。然るに揚州の民傑が淫毒を畏れてその城に入るを拒んだ。督鎮史可法議して瓜州を以て傑に與へて之に居らしめた。已にして清兵大舉して海に入り宿遷を破つた。督鎮可法諸鎮に檄して兵を出して之に備えしめた。高傑首として命を奉して泗水を渡りその部將王之綱をして前驅せしめて睢陽城に薄つて、河南の總兵許定國と城を爭ふた。定國僞つて好みを高傑に納れ傑を城に誘ふて置酒し伏兵を置いて之を殺しその首を持つて清に降つた。詣旦高傑の兵士城に入り之綱等大ひに掠めて幾んど餘す所がなかつた。而も事倉卒に屬し睢陽の兵頗る歸趨に迷つたのであつたが、史可法は變を聞いて馳せて徐州に至つて綏撫に努めた。又高傑の參將李本身を用ひて都督と爲さむことを請ふて福王の允す所となつた。高傑は晩年史可法の爲めに大義名分を說かれて大いに感悟する所があつた。

〔註三〕黃得功（靖南侯）　號は虎山、合肥の人。本姓は王。崇禎中流賊を平くるの功を以て靖南伯に封ぜられ、福王の時更に侯に進む。清兵の南下を拒くべく廬州を守り高傑劉良佐劉清澤と共に江北を分鎮し、當時之を四鎮と稱した。會々高傑と隙があつて兵を構へたが史可法の調停に依つて事なきを得た。後ち移つて太平の

督鎮たるの日清兵來り攻め、得功は倉卒の間流矢に中り、事の爲すべからざるを知つてその箭を拔いて喉を刺して自殺した。得功は天資粗猛で文義を辨じない人であつたが、その行軍には軍規頗る嚴肅で秋毫の犯す所がなかつたので、その到る所民衆の爲めに感佩せられた。

揚州十日記 終

嘉定屠城紀略

嘉定屠城紀略

嘉定　失名氏著

明の烈皇帝（莊烈帝殺宗（又思宗といふ）のこと）殉國（李自成京師を陷れ煤山に自經せるをいふ）の次年乙酉五月初九日南都破れて弘光（明末の宗族福王由崧を指す弘光はその年號）出で亡げたのである。

明の禮部尚書錢謙益（註一）率先して降附し、德を東南に樹てて以て自ら吳中の人士に和解を勸めむと欲した。吳郡の人周筌は謙益が客であつて辨口が巧みであつた。密かに謙益が旨を受けて淸帥豫王に謁して言へらく、吳下の民風柔軟にして檄を飛ばせば定まるべく、用兵を煩はす勿れと。王大ひに悅び卽日官に拜し、降人黃家鼐をして之が補佐たらしめた。筌單騎吳中を安撫した。甫めて都門を出づるや郡邑の長吏風を望んで印綬を解き、士大夫は皆草間に活を求め、過ぐる所は輙ち降つた。

吳に至りたるに家鼎は南面して自若としてゐた。（筌の節度を奉せざるの意）筌獨り微服して市廛の間に出沒したるに、郡人多く之が用を做した。數日の後明の監軍道（官名）楊文總兵五百人を率ゐて郡城に入り、家鼎等を執へて市に戮し、庫銀を發取して車輛に滿載し去り、之く所を知るものが莫つた。筌は民間に匿れて免れ、間行して豫王の居る所に歸來した。豫王は文聰が家鼎を襲殺するを聞き、始めて兵を發して吳に入つた。三吳における禍本は實に此に基つけるのであつた。

五月十三日嘉定縣のものは維揚（地名）が陷つて留都の將守る能はざることを聞いた。十五日不肖の子衿（不良の諸生）縣治（縣廳）に集まりて、廩糧（官廩の米粟）並に鄉試、條編の盤費（賦役の經費）及び私贐の卷資（おくりもの用費）等の諸雜項を索め、分毫も遂げざりしに由つて、臂を攘ふて大いに奸胥を呼はり、亂卒勢ひに乘じて劫奪し、城中鼎の沸くが如きであつた。舊の縣令錢默は本と紈袴子（貴族の子弟を輕稱す）たれば錯愕して爲す所を知らず、盡く公帑を發きて堂上に置きてその取る所を擅にせしめ、重賄を明の嘉定の總兵吳志葵に貽り、卒

を遣はして衛送して境を出でむことを求め、幷に禍を倡へし（劫奪の首唱者）數十人の姓氏を疏して悉く法に抵さむと欲した。隷卒風を聞いて悉く遁れ去つた。三十日には縣令錢默が間を得て出奔した。

六月初一日吳志葵（註二）兵を遣はし諸生十一人を執らへ去つた。

諸生等衣を褫はれて縛に就き、徒跣して烈日の中を行き、窘辱せらるること備に至り、中軍官の力めて救ひたるに緣りて之を釋した。初四日清の大將兼刑部侍郎李延齡副將總兵官署督撫事王國寶大兵を率ゐて郡に入つた。そこで始めて聞いたことは南直隷を改めて江南と爲し、內閣を內院と爲したといふことであつた。

十四日安撫周筌單騎邑に至り、邑中の縉紳皆出でて避けた。百姓は主なきに因つて路に結綵（布帛を出して陳列すること）しつつ城を出でて之を迎へ、競ふて黃紙を用ひて『大清順民』の四字を書して門に揭げ、旋いで、邑篆（郡邑の符節）並に冊籍（戶籍帳簿の類）を郡に上つた。

清は新邑令を授けたので、吳郡の張維熙なる者が新邑令として到着した。

時に六月二十四日であつた。是の日亭午に志葵は百人を以て白布を用ひて頭を裹み侍御の墓の側に伏し、晡時に民家に入りて酒食を亂索し、縣令張維熙を取らむと欲すと聲言し、人定まりたる後、各蒲葦一束を刈りて其の端を燃やして之を持して行き、その光天を燭したれば、城中大いに震ひ怖れた。乃ち人夫を集め鑼を鳴らし礮を發し、東に向つて大いに噪いだ。志葵の兵も群がり噪いで之に應じたので、維熙は恐れて倉卒として亦遁れ、士氏狼狽して出奔し、嬰兒を遺棄し婦女を失散するものが無數であつた。天明には閭巷一に空しく卒ひに他事は無かつた（二十六日は無事のいひ）二十七日志葵復た兵を發して城に至らしめた。內外の百姓謂へらく志葵は回復の師（いくさ）なりと綵を懸け香を執ること周筌の時に十倍した。然るに志葵は此の時南都よりの逃將蔣若來を用ひて嚮導とした。若來は本と市井の無賴である。膂力を以て權貴に遭逢し兵官たるを得、三載ならざるに南京後軍都督に陞りたる者なるが、維揚の守を失へるを聞き其の軍を棄てたるも、仍ほ微裝を作して脫走してゐたが、是に至り志葵に

從ひて城に入り遽かに府庫に趨いて奪掠しようと做たが、府庫には僅かに銅銃數十挺を存するのみであつて、彼は之を取つて急に人をして之を舁がしめて行き、徐家を過ぎて又た大掠を行ひ、寸縷も遺す所がなく雞豚菽麥をも席捲して去つた。貧民の婦女の哭聲が天に震ふた。志葵若來の二人欣然として得色があつた。因て船に重載して海に入つた。

明の淮撫（淮は地名撫は巡撫）田仰等義陽王を奉じ、舟師を以て崇明沙に駐まつてゐた。是の時淮撫田仰、監軍荆本徹、總兵張士儀、張鵬翼、宦官李國輔等兵を合し共に之を奉じた。志葵乃ち妻子を率ゐて之に從ひ後ちに旋つて舍て去つた。

閏六月初六日維熙復た縣に入つた。

初八日清將李成棟（註三）偏裨將梁得勝等、百餘艘を以て步騎二千を載せて吳淞（うーすん）を鎭守してゐた。是の夕東關外に泊して百姓をして聚り觀ることを恣にせしめ、令を傳ふらく婆子（婦人の輕稱）を索め來れと、維熙角妓（軍樂を吹する官妓）を以て之に應じた。成棟大いに喜び

二妓を傍らに坐せしめ、笑つて觀る者に謂て曰く、今爾と一家人たり我を畏るる勿れと。黎明陸路から吳淞に往つたが、甚しい剽掠は行なかつた。惟だ初七日騎兵の先づ至れる者新淫鎭を過ぎて大いに淫虐を肆ままにし、婦女その嬲りに勝えずして斃るる者が七人程あつた。時に大に旱(ひでり)して水涸れ兵船悉く東關外に泊し、梁得勝三百人を以て之を守つた。城外の居民與に貿易すること平時の如く、而もその黠なる者は兵卒の背を撫しつつ相嘲笑すること舊識の間柄のやうであつた。維熙議して人をして水を戽(くい)で東關外に運ばしめた。得勝大いに喜び已に期を刻して吳淞に至るの日が極まつてゐた。十二日城の內外喧傳すらく薙髮の令が出づるありと。人情始めて懼れ遂に變志を生ずる者があつた。是の日志葵は馬軍俞飛熊なる者を遣はし牌諭告書を賚らして至らしめた。その略に云ふ、初十日郡中の民變を生じ、北兵清兵を殺すこと過半、その餘は皆躲れて府庠府の學校に入つたので、已に柵を列ねて之を圍んだ。本鎭卽刻大兵を統べて縣に入らむとす。仰ぎ願くば附近の百姓今晩俱に白布を用ひて

頭を裹み柏枝（松の木の枝葉）竹葉、紅著、鵝毛を雜挿して號と爲し、共に東關の兵を勦さむ事成らば重賞あらむと。各路の鄉兵は久して邑諸生の支益、國子生の須明徵等の訛言の爲に煽動せられつつあつたが、一たび牌ありと聞くや、兵を持して蝟集した。謬まり傳ふらく、志葵は劉河より東して外岡を過ぎたと、又たいふ既に靑岡墩に至つたと。未だ一瞬を經るに及ばずして又たいふ暫らく都察院に憩ふてゐたと。時に城に在るの居民は亦以爲らく、志葵既に城に入れりと、門遂に撤下し閉ぢずして以て遠近の鄉兵を待ちしに、集まるもの漸く衆く、王家宅の鄉兵最も完齊と稱せられその首魁許龍は客歲において闔邑の叛奴を縛誅して威名頓かに著はれたのであるが是に至りて首として淸兵を犯し與に戰ふこと頗る力めた。時に漏下ること數刻にしてその誰が志葵たるを辨別せざるも、胆氣甚だ壯んであつて競ふて火を擧げて得勝の船に擲つた。成棟維揚に下るより、金陵、京口、毘陵の諸處に獲たる所の精金美玉名劍寶刀が算なき程であつたが、悉く一燼に付して了つた。その未だ毀たざる者

は盡く鄉兵の擄る所となつた。船中には多く婦女を載せてゐたが、已に悉く焚かれた。一少婦の最も姝麗なる者があつて呼んで曰く、我は翰林公の女、家は揚州に在るが掠められて此に至つたものである。列公哀憐我を救へと、鄉兵云はく速に水中に投せよ、水淺ければ尙ほ活く可しと、婦曰く、我は鎖に繫がれて船に在りと、語未だ竟らざるに烈焰其身を燒いて了つた。

得勝急に高岡に據り、兵二三五をして隊を作して上より下を射せしめ、皆絃に應じて倒れた。許龍も亦矢に中つて死んだ。因つて鄉兵大に潰えた、是において始めて志葵が固より未だ嘗て至らざるを知つたのであつた。天明首級を計へて淸兵を殺すことが總て八十四人であることを知つた。得勝餘衆を率ゐて吳淞に奔つた。狼狽の極僅かに達することを得た。初め成棟吳淞に至り、馬を策つて四境を周視し駭いて曰く此れ絕地援軍懸隔の地なり、張令我を誤ると。得勝の兵敗れ、兵悉く盡くるを聞くに及び終夜床下を繞つて敢て復た寢なつた。

十五日營中の兵を精選して四十騎を得た。皆驍捷善戰のつはものどもであつた。吳淞の居民朱宇及びその子香なる者を募つて前導と爲し、婁東に往いて救を求めむとした。往いて羅店に至つて敵の爲めに圍まれて奮死突出馳せて西し、三間堂を過ぎて一僧を殺した。四騎の本隊を見失ふたものが有つて、鄉兵馬の後からその佩刀を掣きとつたが、刀が脫落すると共にそれを取つて連りに之を斫つたので、人馬俱に斃れた。二騎は奔り逃れたが鄉兵追及して矟（馬上用の長矛）を攢めて刺し殺した。惟だ一騎苦戰して脫することを得た。前隊は馳せて時家墳に至つた時鄉兵に遇ひ復た馳せて東したが、鄉兵復た大ひに出でて兩路急に攻めた。

諸騎窘み極まり朱香に隨ひ間道より蔡家橋を過ぎ、續つて鎭後に出で、創を扶けて歸り、月浦を過ぎて復た鄉兵の爲に截殺されたものがあつた。落荒（落伍と同じ）して走り吳淞城を望見して猶ほ大ひに救命々々を呼び、丁家橋に至り、人馬の氣息僅に一綫を屬ぐのみであつた。成棟窘迫して計無く、惟だ兵を放ちて大ひに掠め、西の方月

浦羅店に至り、南の方江灣の楊家行に至り、北の方錢家樓、施家巷に至つた、居民流れ徙つて略々盡きた。城中の風聞一ならずして憂怖彌々甚しかつた。志葵を望んで眼穿ち（一心不亂に見つめること）始めて欺かるるを悟り、皆號笑して家を棄てて走つた。是の夕月蝕で倏忽にして皆既蝕と爲つて、時に天に纖雲もなけれど色暗くして漆の如きであつた。占ふて曰く、盡きて光なく、奸人國を悞り百姓死し城邑空しきを主どると、其兆已に成つたのである。

明の都察院觀政進士黃淳耀（註四）及その弟邑諸生淵耀が城に入つた。

時に閏六月十七日であつた。淳耀及淵耀は前の通政使司左通政の侯峒曾（註五）と及びその二子邑諸生元演、元潔と倡へて守城の計を爲した。初め淳耀兵を石岡に避け、同科孝廉（舉人の尊稱）たりし丹陽の葛麟（註六）なるものがあつて二力士と共に嘐（地名）至つた麟の容貌甚た雄武で絕えて文人に類しなかつた。淳耀の門を叩き大聲に問ふて曰く年翁（淳耀への敬稱）は在るや否やと、淳耀の父家柱出でて迎へ、答ふるに鄉に在

るを以てした。麟眉を攢め良々久うして曰く、我之を憂ふ甚し、年翁は純儒にして世故に暗んぜず、恐らく免れざらむ、一たび相見んことを思ひ故らに道を迂にして來りしも今や及ばずと、家柱乃ち固く之を止め、停留飲食せしめた。已にして淳耀兄弟歸り來つたので、之と同じく志葵を雲間地名に訪ふて共に當世の事を論じ、出でて淳耀に謂つて曰く、志葵は庸奴耳、其の言誇誕にして他人をして事に幹らしめ、彼は坐から其の成るを享けむと欲す、必ず國事を誤る、年翁何故に之を信ずるや、天下の事尚ほ爲すべきものがある。然るに君は儒者にしてその倫でない、幸に鹵莽破滅する勿れと遂に臂を攘ふて去つてその之く處を知らなかつた。後にその語る所を追尋すれば明鏡の如く將た蓍蔡の如く適中してゐた。

成棟銳を悉して羅店を攻め、兵を馬橋に屯した。

時に十八日である。鄉兵と水を隔てて語つた。伴り言へらく、成棟等命を奉じて吳淞を守る、羅店とは初より仇讐でない。今道を假りて婁東に歸らむとすれば、並に

侵擾することなく、幸ひに其の一面を寛うせむことをと。鄉兵支洪、陸文等戟を手にしつつ、罵つて曰く、汝曹は檻羊窪豕のみ、痴想を作すなかれと。成棟怒り兵を率ゐて混戰し、陰かに鋭卒を遣はし、東練祁塘を渡り、西荻涇を渡り、繞つて陣後に出でしかば、鄉兵大ひに潰え退いて來龍橋に屯し、接戰することが良々久しかつたが遂に大敗した。鎭に入つた時に日が未だ出でなかつた。居人方さに市を爲しつつあつたが、變を聞いて急に屋に升り、步兵も亦升り、東西馳逐し、屋瓦亂飛し騎兵四百人を殺し大ひに呼んで曰く唐秀才何に在るや百姓にして縛出するものは賞あらむと、唐秀才は景耀がことである。初め吳宏宇と鄰を爲してゐたが、宏宇が成棟に降るや景耀數々其罪を面責し言を肆にして極罵した。且曰く歸つて李成棟に告げよ、汝は是れ明朝の人何ぞ淸に降投せるや速かに反正し以て大戮を免る可しと。宏宇恨を銜むこと骨に徹し悉く成棟に告げた。景耀復た一白牌に大書して馬橋の南に立てて成棟を諭して降らしめた。是に至て淸兵の得る所と爲り市に磔せられた。

邑諸生唐培鄉兵を卒ゐ巷戰して死んだ。

唐培誓つて反顧しないので、清兵銃箭並び發し、培爲めに殺されて鎭已に破れた。時に諸生朱霞なる者があつた。尙ほ小蓋を張り（小橋を造るの意）屋に登りて金鼓を鳴らし、衆を集めて復た戰はむことを冀ふた。清兵四集し身數創を被つて河に墮ち、終日號呼して死した。成棟は鎭民たる支廉が鄉兵の首たるを知つて、支家橋一帶の房屋を焚燬して略々盡きた。男婦殺さるる者一千六百四人であつた。是日城中の百姓等共に須明徵なる者を殺し其の室を毀つた。明徵は故の尙寶鄉須之彥なる者の猶子である。素行修らずして鄉里の爲めに擯斥せられてゐた。一たび南都の破るるを聞くや、卽ち冠帶して軒（大夫乘用の大車）に乘じて成棟に謁し、嘉定營守備の事を稱署したが、仍ほ志葵に通じ復た監紀、推官（節度觀察兩使の屬僚）のことを稱（をこな）ふた。勢ひ維熙を劫かし、官銀數千を取り、家丁六十名を招いて悉く錦綺を衣せしめ、佩刀を懸けて街市間を招搖（遙遙のアテ字）し時に之を卒ゐて安亭鎭に至りて其の奸豪を訪ひ、與に膝を促へて密語することが數

ばであつた。毎に揚言すらく人を遣はして各鎮に赴き、鄉兵を請ふて諸要害を分守すと。時に城守頗る嚴重であつたが、夜半に關門を叩く者が有つて、明徵兵を請ふの人と稱した。特に關を啓いて之を納れ且つ鄉兵何處に在るやを問ふた。漫に應じて曰く城主性慳貪にして肯て糧を發しないで已に散じ去つたと。衆口に之を詰問すれば語支離を極めたので始めて大ひに之を疑ふた。

十八日薄暮城中競ひ傳ふらく、明徵の家奸細（軍事探偵）を窩藏（隱匿と同じ）し、復た私に都督の牌印並に冠帶、盔甲數十副を造り、謀つて盡く滿城の百姓を殺し以て成棟の兵を迎へむとすと。合城（滿城）驚擾した。頃（しばらく）あつて西關外に奸細を獲て之を嚴鞫すれば、その口供が須（明徵）の黨であつた。一時大ひに譁（さわ）いでその眞假を辨じなかつた。明徵倉卒に出亡したのであつたが、南開に至つて縛を受け、步稍々遲きを以て大梃で之を擊つた。彼は疾呼寃を稱したが、誰人もその辨解を聽くものが莫つた。驅つて都察院前に至つて首を斬り腸を刳り四肢を斷ち、分ちて之を各城門に置き、その家丁を捕へ

て悉く之を誅し、その家室を糜碎（粉虀と同じ）した。

十九日淳耀等相與に謀つて曰く、今事騎虎の勢に成るも主なければ必ず亂れむと。乃ち元演をして書を作らしめ、急に其父嗣曾を促がして城に入らしめ、鄉兵も亦幟を列ねて往いて迎へた。既に至つたので衆を集めて公議し地を畫して守つた。東門は嗣曾が主と爲つて邑諸生龔孫玹之を佐け、西門は淳耀主と爲つてその弟邑諸生淵耀之を佐け、南門は孝廉（舉人）張錫眉主と爲つて、前秀水縣の儒學敎諭龔用圓之を佐け北門は國子生朱長祚主と爲つて鄉袞（鄉貢の士）唐咨禹之を佐けた。處分已に定まつたので各自に兵を卒ゐ城に上りて巡邏した。嘉定の人士爭ふて袴を縛り刀を執つて以て從ふた。人情頗る皷舞せられしを覺えた。東北の二門は俱に大石を用ひて街路を疊み斷つて、惟だ西南の二門のみ稍安く時に啓き時に閉ぢた。仍て庫木亂石を用ひて道塗を横塞し以て敵の兵鋒を防遏した。仍て亦挨門（押し開きの出來る小門）を立て且丁法を出した。丁法は之を上中下の三等に分ち、上戸は丁若干を出し衣糧自ら備はり（衣食自辨のこと）仍ほ銀若

干を出して客兵の糧餉に備へ、並に守城頭目の燈燭の費に宛てた。中戸は丁若干を出だし衣糧自ら備はり、仍ほ銀若干を出し、下戸は止だ一丁を出すのみで、堞(ひめがき)に分付して守つた。毎丁日給六十文、衣糧燈燭悉く備はつてゐた。城上は四隅に分たれ某地より起つて某地に至りて止み、各圃(各班のこと)に分屬し、圃毎に一人を擇びて長と爲した。日入つて後當事者親しく自から巡歷し以て勤惰を稽た。而も其の大事は專ら峒曾淳耀の處分に屬してゐた。是の日二都の鄉兵一の投牒者(官府の移文を携帶せる者)を縛し至つた。稱して間諜と爲した。之を鞫すれば實は志葵の書を送るの人であつた。そこで函を發いて中に吳門の虜斬馘殆んど盡き抗州の虜貝勒(清の皇族)の亡(出奔)を云ふの語があつた。當事者深く信じて疑ふ所なく、その罔(たばか)らるるを虞(はか)らないのである。

二十二日志葵復た牌を遣はして至つた。而して遊擊蔡喬を遣はし兵を督し協勦することを許したのである。當事者議して云ふ、新令張維熙淸兵の署する所に係り與に守り難きを以て驅つて城を出でしめ、明の原任儒學訓導萬達を推して縣事を攝せしめ

巡司俞尙德を捕官（巡捕役）に充てた。是日復た四人の健兒が有つて志葵の牌を持して來た。然るにその原牌が互ひに異つてゐたので、嚴に之を鞫問して、婁東の諸生浦嶠浦嶠なるもの僞造たるの口供を獲た。彼等は將に我が備らざるに乘じ縣城を襲取せむとするのであつた。既に實を得たれば立ろに四人を市に梟した。爾時聲勢岌岌として人々自ら保つ能はずであつたが、然も侯黃諸縉紳の力を協せて城を守るを恃み難を避くる士民老を扶け幼を携へて歸來するもの路に絕えなかつた。城上白旂を揭げ『嘉定恢剿義師』の字を大書した。奈にせむ兵と餉と兩から缺げて、仗る所は惟だ城外の鄉兵であつた。乃ち計を設け四もに流言を布いて云はく、淸兵は百姓を驅つて薙髮し訖つた。卽ち白及を以て逼つてその妻子を自殺せしめ、藉て兵と爲して前隊に居り矢石に當らしむれば必ずや活くるの理なからむ、その他に客死せむよりは衆を集めて之を禦むに何若ぞや、乃ち僥倖にして免るるを獲べしと。鄉民之を聞いて大いに震ひ怖れた。弱者は終日戸に鍵して妻子と對泣し、强者は木を斬りて竿を

揭げ、金鼓を擊ちて衆を集めた。然も百姓騷然として寧處に遑なかつた。因て念ふに燒薙（家を燒くこと薙髮令のこと）の一事は志葵其の首禍たれども、支益が其間に煽動するに非ざらしむれば敗決此の如きに至らないであらう。且つ益は閤部史可法の標下（旗下）に在りて聽用せられ胖襖銀（可法肌っきの銀）五千兩を領してゐたが、南都破るや悉くその銀をして私橐を飽かしめた（私囊を肥やすの意）ので衆之を取つて戰兵の餉と爲さむと欲した。仍て競ふて往いて之を攻め勢ひ轟雷の如くであつた。益の父子祖孫共に死するものが五人であつた悉く其の頭を斬つて明徵と頭を並べて之を城上に懸けた。頃刻（しばらく）にして南翔の人がまた明徵の妻子を獲たので、斬割屠戮一に明徵の如くにした。鎭中の著族李氏は世廟（明祖のことを指す）以來聯綿として絕えなかつた家柄であるが、貢士李陟は少しく儁才があつて名を當世に知られてゐた。城に居て南都破るるを聞くや勸農公署に於て鵠社なるものを起し、籤を傳へ更を巡り、何凌虛等と戰兵を招集し匡定軍と號した。南翔の諸富賈と議し戶每に人を派して餉を出さしめたので、諸賈人は皆之を銜んでゐた。明徵

を誅するの夕陟は方さに南城に會飲しつつあつたが、變を聞き遽かに杯を擲ちて走り夜を犯して出奔した。南翔の里兒之を怪しみ妄言すらく、李氏潛かに敵に通ずと洪濱なる者があつて諸生間に暴かに起つたのであつたが、李氏に阿附して衆の爲賤められ指して奸細と爲した、濱恐れて李氏の宅に匿れた。鎭中の諸惡少之を門に群擁した。陟その從叔と之に抗した。濱等衆に對して猶ほ漫罵自若たりであつた。里衆素より李氏を憚つてゐたので、事定まるの後必ずその罪を正さむことを懼れた。因て遂にその門を破つて直ちに入り、少長となく皆之を殺した。諸李を分投捕殺してその族を赤くした（鏖殺の意）。各路風を聞き競ふて相盤詰（匪族の罪を問ひ糺す意）した。路人の單行するものにして稍々疑似に涉れば卽ち縛し去つて、亂槍もて戮死され、屍を河中に棄てた。甚しきは一言意に忤ふに至りて白刃驟かに加はり、その人方さに辨を置かむとして身首已に離るるものさへあつた。窮鄉僻壤は自から相仇殺し、三四人黨を聚め刃を拔いて人家に至り、往々にして滿門（一家全體）戮を更け遠近殺害さるるもの算なき程

であつた。時正に亢旱にして炎威人に逼り、道榜の乞丐爭ふて毒を井中に投じ以て鄉兵を扼した。事露はれ頸を引いて刃を受くるに一言なく、その使嗾せらるる所を知るに由がなかつた。橋道扼要の處皆廠を設け晝夜共に守り、五家の聚落と雖亦鄉兵を起すも、餉なきを以て一再城中に至つて之を領せば、卽ち跡を絕ちて來らない。當事者之を懼れ榜告を四門に張り、此の後鄉兵の來る者は先づ護國留皇光慶寺中に集まり、首たる者一人城に入つて餉を領せよと。是に於て來る者が漸く衆きを加へた。

二十四日成棟その弟を遣はし精騎數十を統べ、路を奪ふて婁東に往き救を求めた。涕泣與に訣別して曰く、我軍の成敗此一擧に在り、汝勝たざれば復た我を見る勿れと。諸騎奮死衝殺し、一路搏戰以て北門に至つたのであつたが、鄉兵大ひに集まり諸騎前後敵を受けながら漸を以て倉橋街に逼り入つた。鄉兵兩路夾攻し將に火を擧げて之を焚かむとした。諸騎窘縮死を冒して突出したが、鄉兵合圍して五騎を殺獲

した。餘騎將に倉橋街を過ぎむとしたが、諸生朱元亮なるもの薪炭數十籠（目のあらさ籠のこと）を出だし、火を橋上に燒んにし、酒醋（酢と同じ）を用ひて之に潑（そ）いだので橋石が頓に毀たれた。城上亦火礮を發して三人一馬を殺した。連橋擊斷せられて一人手に佩刀を撒（す）てて創を被つて路旁に死んでゐた。蓋しそれが成棟の弟であつた。從騎急に馬を下りてその首級を取つて鞍後に掛け、後ち馳せて東して復た吳淞に返り路に哭して曰く、我等は高鎭の勁兵なるが、邢大大（註七）に隨ひて降りし後ち、過ぐる所風靡せるに嘉定縣は何物の蠻子ぞ、來つて數日我が副將六員を殺し然も幾日か援無くして我軍の生路が絶えたと。成棟は弟の死を聞き日夜諸副將と相對して涕泣してゐた。然も奈（いか）にせむ鄉兵は本と村農烏合の衆であつて、初め將領なるものなく、單に輿に乘じて一聚したに過ぎないのである。卽ち鳥獸散ずれば郊外一人の往來するものなく孤城蕩々として僅かに一白旂を存するものが、風を迎へて招颰（翻飜たるの意）するのみである、成棟軍中に於て黠者二人を選び其辮髮を去つて僧人の服を作し、潛んで城下に

至り、偵して實を得て歸り報じた。成棟手を擧げて額に加へて曰く、天なり天なりと、始めて身自から婁東の兵を合はせ率ゐて嘉定を破らむとを謀議したのであつた。爾の時城中手を束ねて策なく、唯だ連りに志葵に請ひ星馳して赴き救はむことを翹望するのみであつた。時に志葵は已に義陽王に貳心を懷き、計を以てその妻子を脫し遁れて雲間に歸來し、諸鄉貢並に富賈の金を斂めて牙營を柳河に建てた。卽日遊擊蔡喬を遣はし兵を率ゐて來援することを許諾した。當事者大いに喜びまた白旂を用ひて『遊擊將軍蔡督領兵十萬鄉兵三十萬に將とし日を刻して會剿す』云々を、大書し猶ほ老營を聳動して內應を爲さしめむことを冀ひ、急足（飛脚のこと）を募り之を齎らして吳淞境上に至らしめた。成棟の諜者早くも近郊に埋伏して纖悉畢知（その詳細を偵知した）した。二十五日城中書幣（書簡贈物）とを以て蔡喬を塗に迎へしめたが、其の兵は三百に滿たないのみならず、癃弱（羸弱さい）（ふに同じ）振はないのであつたが、惟だ蔡喬のみは頗る雄健であつて鐵簡（鐵板のこと）の重さ二十五斤なるものを使ひ差以て用ゆべきであつた。その携ふる所

の火藥糧儲は舟中に在つたが、姑く之を城内に置かむことを求め、而かも自から兵を率ゐて城外に宿營した。議者皆曰く宜しく之を許すべし、彼戰ふて勝たば軍資我に在れば其の心益固けむ、倘し勝たざれば留め以て質と爲さば勢ひ敢て我を棄て去らず。と嗣曾淳耀等喬が素と微賤にして心保つ可からざるを以て、乃ち人を遣はし饋問せしめ舟を南關外に泊せしめた。

二十六日五更方さに人を遣はし羊豕を市ひ來らしめて旂を祭り、令を傳へて東關外に營を安置し、次第に舟を引いて前ましめた。成棟諸將を遣はし枚を銜みて疾走し已に陣を嚴にして之れを待つた。蔡が兵措く所を知らず、爭ふて水に赴いて奔逃し追騎鎗尖を以て其胸を貫くこと魚鼈を刺すが如くした。時に喬は尙舟中に臥してゐたが變を聞き驚起し、鐵簡を持し躍つて岸に登り步行陣を衝き頗る殺傷があつた。一馬を奪ふて之に乘り、孤身獨戰し力盡きて敗れ回つた。清兵之を圍むこと數匝であつた。東關に徐福なる者がゐた。力を奮ふて往き救ひ、喬と與に戰死した。其の

兵は初から紀律あるものでなかつたので一時に潰え散つた。峒曾、淳耀等堞を攀ぢて之を望み喬の敗るるを見、惟だ高皇帝、烈皇帝、在天の靈を呼び、慟哭相向ふ而已であつた。成棟十餘騎を遣はし將に城に薄らむとする者の若きであつた。城上連りに大砲を發して二人を傷け遂に引き去つた。新涇鎭を過ぎ火を縱ちて屋を焚き鷄犬悉く盡きた。成棟吳淞に至り、步兵を月浦、楊家行等の地方に分遣し、人を捉へて頭を剃り且云はく、我を助けて城を破れ財物は汝恣ままに之を取れと、時に吳淞の老營は已に降順し、因つて沿村の强壯を擄へて之に益し兵を增し兵勢復た振ふた。

二十九日成棟衆を悉して東門を過ぎ迤邐て以て北した。當事者十金を懸けて人を募りて濠を渡り倉橋街一帶の民居を焚かしめた。成棟婁塘に至り磚橋に紮營した。鄉兵豫め鎭の東偏に於て高臺を爲くり用ひて偵探用とした。弓箭手二十餘人を出だして宣家墳に立たしめ鄉兵その左右を環集してゐた。成棟騎兵をして左右翼に分たしめ、自から中軍に將とし衝殺衝突といふに同じして前んだ。鄉兵力戰然も步騎の敵する能はざ

るを以て死傷略々盡きた。會々日暮れたるを以て成棟法螺を吹いて兵を收め村落に入りて淫殺度なく、その鷄豚を取つて夜る縱飲輟まなかつた。各村鎭猶ほ傳ふらく清兵吳淞より來つて一路鄉兵の爲に截殺(殺戮と同じ)せられ、存する所十數騎に過ぎないので今や力竭き勢ひ窮まり、精金百鎰を献じ路を買ふて婁東に歸らむことを願ふたと又た傳ふらく二十三都の鄉兵夜る豆葉の一大梱(捆包のこと)を背に負ふて清兵の熟睡を伺ひその營に入り、群馬を誘致して之を南に驅り去らしめた。騎兵罪を獲むを恐れ逃逸する者過半と諸鄉兵の未だ兵勢に暗じないものが爭ふて糧を裹(つつ)み兵を礪(とい)で來會した。峒曾淳耀等親しく自から城に臨み、勉(すす)むるに忠義を以てし言泪と共に下つて人皆感奮した。因て令を諸鄉に下し、勇能く衆を鼓して敵に赴く者人毎に先づ白布二疋を給するを規定した。仍ほ人毎に餉銀二錢を頒折(わかちかたへ)ることとし、能く敵兵の首級を獲たる者には顆毎(首毎に)一級に銀十兩を給することとした。

七月初一日兵を磚橋の東に會した。

十餘萬人を下らなかつた。排擠擁塞、その紛呶すること聚蚊の如きであつた。多きが適々累を爲すのである。清兵戰ふ毎に必ず左右翼を分ちてゐた。鄉兵は陣勢を知らないで之を呼んで蟹螯の陣と稱ふた。挑戰を發する毎に多く十餘騎に過ぎないで皆散落して一處に集まることをしなかつた。諸鄉兵遙かに清の兵の出づるを見て擁擠をしあひ、へしあひすること益々甚しく、手臂を摩戛しつつ軋軋聲を作した。淳耀事の急なるを聞きその僚壻同僚のこと たる諸生徐文蔚をして之を慰勉せしめ、西門鎭の鄉兵を率ゐ疾く馳せて赴き救はしめ、拜して之を送つた。杭家村は安亭鎭の一小聚落である。亦衆を集めて義に赴き、獨り一紅旗を揭げて前哨にあつた。諸鄉兵因て言へらく紅旗は宜く先鋒たるべしと。紅旗を執る者は抗文若といへる者であつた。その人曾て擧子の業武擧の業を習ひ年少氣鋭卒爾獨出したのであつた。其の隣人毛玉佩なる者斬馬刀を揮ひて直前亂斫して騎兵二人を殺した。戰良々久うして復た一人を殺した。將に其馬を奪はむとし清兵矟を攢めて之を刺し、玉佩、文若並に陣に沒した。西門鎭の鄉兵

馮滿龍瑞許臣等猶ほ死奮血戰し力を併さむことを大呼したが卒に應ずる者が莫つた乃ち兵を曳いて反走した。徐文爵が殺されてから清兵勝に乘じて直ちに前んだ。走る者爲す所を知らず相踏藉して死し、眼を抉り腸を流がす者その數を知らなかつた前は大河を阻て退かむと欲するも路なく、殘兵競ふて戈を投じて赴き下つた。時正に溽暑にして數々暴雨があり、河水驟かに漲つて屍骸亂下し、一望際涯が莫かつた。成棟大いに兵仗を陳ね、鄉兵架する所の高臺に踞り、兵を麾いて鎭に入つて肆ままに屠戮を行ひ、共計一千七十三人を殺し、婦女を擄掠することが數を知らなかつた。美婦室女數十人を選びて宣氏の宅に置き、逃逸あるを慮り悉く衣裙を去つた。その淫蠱毒虐實に名狀することが出來ないのである。且つ又た部署を分ちて金帛を括取し鹵掠すること之を滿載して婁東に往いた。城中猶は訛傳すらく鄉兵大いに捷つと酒飯若干を煮、以て勝兵を犒ふた。之を頃くして敗を聞いたのであつた。因て悉く城中の老幼を一括し驅つて城に上らしめた。城中之が爲に連月連夜敢て交睫睡眠する

者がなかつた。東西南北の荒落の處に於て各々層臺一座を設け衆を集めて之を守つた。獲る所の奸細に詩謎（詩句の隱語）を衣領の間に藏するものがあつた『女墻無樹不棲鸞』の句があつた。因て此處に內應あらむを疑ふた。

是の日東關外成棟の榜文を傳へ入れた。中に『門を開いて降る者あれば誓つて一人を殺さず』の句があつた。或人謂へらく大勢已に去る諸公宜しく十萬の生靈の爲に計を爲すべしと。淳耀怫然として案を推して痛哭した。嗣曾、錫眉等も亦悲みに勝えず榜を取つて共に之を裂き、急に人を遣はして沿城一帶の民居を焚いた。烟焰天に漲り日夜を累ねて息まなかつた。また烈日中において民夫を督促して磚石を運搬して之を城上に置て敢て暫くも休まなつた。城外を視るに一望曠蕩として鄉兵は一も至る者が莫つた。黃昏に近き頃ほひ風景慘憺として鬼哭啾々、城中泪を掩ふて相視て共に必死を知つた。

清兵婁塘に至り甲を解き戈を韜みて寂然動くことを敢てしなかつた。

初三日婁東の兵を會同し大衆を擁して至つた。鋭を盡して城を攻め砲聲轟々として絶えなかつた。守城の百姓股栗して色變じた。當事者分役（手分けすること）慰勉して曰く。我爾曹と室家婦女盡く是に在り、少しく蹉跌するも萬家命を同うすれば決して憂ふる勿れと。百姓哭應（なくなくこたへ）て曰く諾と。復た重賞を懸け人を募りて濠を渡りて西關外なる河南一帶の民居を焚かしめたが、肯て應ずる者が莫つた。

是より先縣令錢益謙去るの時庫を開いて盡く群胥（數多の小吏）に給し、軍器火藥は人の取るに任し、四門の城樓は扃鎖（とぢとざす）すること甚だ堅かつた。軍器火藥にして尚存するあるものは鄉兵至つて悉く之を取つたので、是に至つて徒手敵に應ずる而已であつた。嘉定は本と土城であつて、嘉慶、隆武の間倭奴屢々攻むるも克つことが出來なかつた。邑令楊旦礎を築くより城最も完固と稱せられてゐて、清兵大礮を發して之を衝いたが、その頽落すること數版（一版は長さ八尺）に過ぎなかつた。廼ち多く板扉を舁（かつい）て東北城下に至り以て矢石を禦ぎ、數十人をして其の下に伏して大なる穴を穿ち、腰間各長

繩を繫ぎ、死者あれば卽ち牽き去らしめ、復た壯丁を用ひて之を補はしめたが、その穴遂に透(すい)たので急に金汁(銅鐵の溶液)灰瓶を用ひ、力を盡して防禦し、缺陷の處は巨木を下して之を塞いだ。淸兵佯つて東川を攻め、潛に卒を遣はして北川に至り、水竇(水閘と同じ)より入らむと欲した、城中復た大石を連下し淸兵能く克た莫つた。是の夕赤氣有つて北方に起り、俄かに變じて黑と成り、その長さ天に亘つた。隣を守る者喧傳すらく、神人あつて髮を被ぶり劍に仗(つえつ)いて馬を雲霧中に立てた。皆曰く元武神也と空を望み羅拜して曰く、神人相助け我が屬患ひ無しと、然も亦城下を瞰(のぞ)めば兵益〻衆くして攻むること益力め、砲を擧ぐることが益繁げかつた。終夜震撼し地裂け天崩れ、礮硝鉛屑城中の屋上に落ち簌々として雨の如くあつた。嬰兒婦女共に狼奔鼠竄したのであつたが、窮苦に至ると雖必ず一簪一珥(かんざしとみみわ)以て肘間に繫(かけ)て曰く、此れ買命の錢也と。挨(せま)つて(兩軍相逼るの意)初四日に至り五更より大ひに雨ふり、守城の百姓露立すること三晝夜にして兩眼浥爛(うるほひただる)して瞶騰(ぼんやりすること)として仆れむとした。復た暴

雨に遇ふて擧體全身沾濕し、飲食幾んど絶ちて自ら支ふることが出來なかつた。時に當事者諸の孝廉生たる青衿布衣の書生等と劍に仗いて雨中に立てゐたが、守城者の將に散せむとするを見るや大ひに驚き分投勸勉したが然も禁ずる能はなかつた。清兵守城者の漸く弛ぶを見るや攻むること愈々急であつた。多く軟梯繩梯子を縛して城下に至り一將大卓を以て其を覆ひ梯を躡みて上り、その勢ひ飛鳥の如きであつた。城上の磚石雨の如きであつたが、悉く卓上に中りて傷かなかつたので一躍して登り、遂に東關を斧斷し兵を縱つて大ひに入つた。峒曾猶は城樓に坐し指麾すること自若であつた。二子即ち淳耀淵耀の二字傍らに侍してゐたが遽に之を呼びて曰く、事急なり、何を以て計を爲さむと、答へて曰く死ある而已復た何をか言はむ恨む所のものは一城の百姓を枉送敵手に委ねることする耳と。語未だ竟らざるに陣を守る者馳せて過ぎ大呼して城已に破るるをいふ。峒曾急に二子を呼んで去らしめたが從はないので復た大聲之を訶ればしかれば、走ること數歩にして復た還り來つた。峒曾怒り叱して曰く、我れ國事に死す固よりその分

である。祖母の在るあれば若輩は名に我に代つて奉事すべきである、我を戀ふて何爲(なにする)ものぞと。二子慟哭して去つた。然も後に孩兒橋に至つて皆殺されて了つた。峒曾葉家池に溺れて死せず、水中に立ち嘆じて曰く、人の死も亦大難事なる哉と。回顧して一伍目(伍長と同じ)を見れば乃ち其兵憲(兵事管掌)の時の隷(從僕)であつて峒曾に隨つて城に居たものであつた。因て之をしてその首を水中に抑へしめて速死を冀ふたが、隷は泣いて從はなかつた。固く之を命した。乃ち兩手もて峒曾の首を抑へて水に入れめ、啾々として聲が聞えたが復た死せないのであつた。遂に清兵の爲に池より引出されて斬られた。その首を競ひ奪ひて之を成棟に献じた。四門に梟示せられた上に尙一日また門左の旗竿上に懸け『逆官侯峒曾首級』と大署して衆に示した。

初六日清兵城を棄て去つた。峒曾の梟首は繩絶ちて地に墮ちた。眼鼻已に潰(つぶ)れてゐたが鬚髮猶ほ赫然(あきらか)として辨ずべきであつた。國子生(國子監の諸生)朱熙なる者之を知り、急に捧げ歸り廠頭里に篋送した。當時又その屍を覓めたが得ることが出來なかつた。其僕

路に哭して曰く、主君殉難の時下體に黄紗の袴を著け、綠絲帶を用ひて韈を結んでゐたと。一童がゐてその所在を知つてゐて之を指示した。之を驗ぶれは良とに是れであつたので始めて木に就く棺に斂めることを得た。蓋し神助あるものの若くであつた。

城破るるの時に方り、西門尙來だ兵有らざりしを以て、城中の婦女悉く西に走つたのであるが、街路俱に亂石あつて阻塞してゐたので、皆顚倒困頓して纔かに達するを得、號哭して關を啓かむことを求めた。淳耀堅く鎖鑰を握つて應じなかつた。その同榜同期の及第者の進士王泰際なる者が適々至つて百姓の爲に命を請ひ語甚だ哀懇を極めたが應じなかつた。そこで復た年誼年來の交誼を以て立ち動かさむとした。淳耀大ひに怒て曰く、若し城を獻ぜむと欲せば請ふ自から之を爲せ、我は頃刻にして死するの人年誼を顧みるに遑あらずと。泰際急ぎ南門に走り城に縋りて逸出した。俄かにして城破るるを聞き、方さに關を啓くを聽した。然も城門は巨石の堵塞列べて塞くする所と爲

り、僅かに一人の往來を容るるのみであつたが、鼠竄して出づるもの尙數千人、清兵の至るに及び悉く屋上より奔馳して通行碍け無かつた。難民の下に在る者反つて阻絶せられて路を得ず、悉く河に投じて死し、水之が爲に流るるを得なかつた。

淳耀兄弟事の爲す可からざるを知り將さに城を下らむとするに方り、紀綱の僕（僕の俗稱）に遇ひ急に問ふらく我父は安くに在りやと。謬まり應へて曰く亂兵中に死したまひぬと。淳耀等二人痛哭地に仆れて起つことが出來なかつた。時に大雨後の濘（ぬかる）み甚しく淵耀自から一馬を控御しつつ至つた。そこで淳耀を促がして共に乘りて一庵に至つた。乃ち平日その同年の友陳俶の讀書する處であつた。主僧の無等と號する者尙在つて茶を献じた。淳耀等茶を啜り畢りて僧無等に諭して曰く、大師急に避け某等兄弟此より辭す（訣別するの意）と。因て鍵戸（鍵のかかりし部屋）を啓き筆を取りて書すらく『遺臣黃淳耀弘光元年七月初四日西城の僧舍に自裁す。嗚呼進んで力を皇朝に宣ぶる能はず、退いて身を自隱に潔うする能はず、讀書益寡く學道成る無し、惟だ耿々して滅せざるは此心

のみ、異日寇氛復た靖く、中華の士庶再び天日を見ば、その世を論ずる者尙ほ予が心を知らむ』と書し能んで淵耀を顧視すれば已に赫然として梁間に自經してゐた。淳耀屋を仰いで嘆じ、遂にその側に縊れたのであつた。初め淳耀心理學を研究し書に於て窺はざる所無く著述甚だ富でゐた。既に魏科に連掇（高等の科擧に登第すること）するも尙布衣徒歩しつつ秀才の時（初科の時）に異らなかつた。嚴に家人を勅して外事に預る勿らしめた。居常鬱々として志す所遂げざるを恨みとした。國變より以來復た益々無聊であつたが、弟の淵耀が毎に之を譬解（慰藉と同意）しつつあつた。一日淵耀外より入り幼弟の庭に戲るるを見、その背を撫して曰く、六郎！汝豎子何をか知らむ、汝の大兄は必ず節に死せむ、兄死せば我亦獨り生くるに忍びず、汝が將來何れの處に流落するを知らず爾尙ほ嬉笑する耶と。時に淸兵未た至らなかつたが、衆人詫りて不祥の言としてゐたが、是に至つて果して驗があつた。

明の張孝廉錫眉南城を守り必死を度りて之に死した。

錫眉は六月二十六日に於て絶命の詞を作り、袴上に大書して云ふ。『我が生辰(たつ)ならず時に遭はざるの意して玆里に僑居す、路宗親に遠ざかつて貌として同氣を隔つ。城と存亡し死も亦義の爲めにす。後の君子我を遐棄せざれ』と。城破るるを聞くに及び其友に謂て曰く、宜しく速かに死すべしと。對へて曰く城破の原因我輩に由らず、空死何爲(なにすれ)ぞ、君若し獨り心に斷せば不可なる所なしと。錫眉先づ妾を驅つて水に入れ方さに自ら溺れた。襲敎諭用圓、其の兄邑諸生用廣を抱いて大いに慟哭し、相謂つて曰く我が祖父淸白自から矢(ちか)ひ已に三世を經たり、今日苟且して存を圖らば何の面目あつて祖宗に地下に見えむと、因つて共に溺れた。兩屍浮びて水面に出でたが、猶ほ手を握つて解けなかつた。其弟邑諸生用厚は妻子を携え出で避けたが、亦自から溺れ死んだ。蓋し兄弟三人同時に殉難したのである。城の初めて破れたるは東關の北偏第一鋪であつた。成棟尙東關外の小武當廟中に在つたが、辰刻には乃ち門を開いて入り、令を下して城を屠つた。約して一砲を聞けば乃ち兵丁遂にその殺掠を肆にする

を得せしめた。家ごとに至り戸ごとに到り、小街僻巷に至るまで窮め搜らざるは莫つた。亂葦叢棘は必ず槍を用ひて亂攪し、人なきを知りて然る後ち已んだ。兵丁一人に遇ふ毎に『蠻子寶を献ぜよ』と呼び、其の人悉く腰纏を取つて之を奉じ、意滿つれば方さに釋き、他兵に遇へば又脅かし取らるること前の如くす。而も献ずる所多からざれば輙ち斫ること三刀、物盡くるに至れば則ち殺した。故に僵屍路に滿ち傷痕が體に遍くあつた。此れ屢〻斫られて然らしめたので、一人の致す所では莫かつた。予が隣人偶〻叢篠中に匿れて免るるを得た者が、親しく清兵が人を殺すの情狀を見たるに初め斫ること一刀にして大呼『都爺饒命』(都人士我を助けよ)と、第二刀に至りその聲漸く微(かすか)に、已後亂斫すと雖惟だ寂然として動かない(致命のこと)刀聲刻然として遠近に遍ねかつた。命を乞ふの聲嘈雜市の如く、殺す所計數すべからず。その梁に懸る者、井に投ずる者、肢を斷つ者、面に血(ちぬ)らるるもの、斫られて未だ死せず手足猶ほ動くもの骨肉狼藉たるもの彌望皆是れで、河に投じて死する者亦數千人に下らなかつた。三

日後西關より葛隆鎮に至る浮屍河に滿ち舟行篙(水棹)を下すの處なく、白膏(人間の膏油)水面に浮びて坌起(もれあがる)すること數分(四五分の高さに湧き堆くなること)であつた。婦女の寢醜陋なる者は一見輙ち殺され、大家の閨彥(夫人)及び民間の婦女にして美色ある者は生ながら擄められ、白晝街坊中において、衆兵之を奸淫し恬として愧づるを知らないのであつた。倘し從はざる者あれば長釘を用ひて、その兩手を板に釘(くぎ)づけにして仍ほ之を逼淫(强姦のこと)するのであつた。嘉定の風俗は雅(たしな)くして婦節を重んずるの風があつた。之が爲に慘死する者無數であつたが然も亂軍中でその姓氏を聞漏らした。

初六日成棟民船を拘集し、金帛子女及び牛馬羊豕等の物質を裝載すること三百餘艘で婁東に持ち去つた。その他財物木棉もの等は悉く委棄して取らなかつた。初十日の後士民の倖ひに脱する者始めて絡繹として歸來し、城に入り室家の零落、里井の蕭然たるを見、聲を放ちて大哭せざるは莫つた。

十四日城の內外喧傳すらく、明の大將左良玉已に南都を復し、清將李成棟等俱に揚

州に遁れ歸ると。或は云ふ成棟悉く金寶を輦(くるま)にして高郵州に置き、秋高きを俟ちて後復た大擧を謀ると。今崑嘉(嘉定縣)屠らるると雖清兵業に已に解散し、爾時人心惶々として不根の語(流言飛語)を聽き敢て寧居するものが莫つた。

二十三日江東の朱瑛なる者自から遊擊將軍と稱し五十人を率ゐて縣に入つて牌を行ひ(告示を出すこと)百姓を督し城を守つたが肯て應ずるものが莫つた。諸生張有光なる者郡より歸來し衆に從ふて薙髮してゐたが、都察院前を過ぎ門の啓くを見、偶〻入つて閑觀(俗に見物といふ意)しつつあつたが、其處に朱瑛が立つてゐて人をして之を縛せしめ、叱して北面して跪かしめ、その罪を數へて之を市に戮した。時に民間競ひ傳ふらく明の兵至ると。瑛西門を出でて護國寺に就き、已に薙髮を經しもの、免死牌を給與したので、百姓は爭ふて之を取つた。葛隆鎮、外岡、馬六、揚家行等の鎮には鄉兵復た聚り薙髮の者に遇へば輙ち亂殺した。因て海路燒刼せられ煙焰四もに起つた。遠近風を聞き髮を護ることが益々堅かつた。徐元吉なる者があつて、明の吳淞の所諸生徐

鳴鹿なる者の子であるが、向ふて本鎮の中軍であつた。成棟便ち坐營把總の事を署理し、嘉定破るるや兵一名毎に勒して紬衣五領、銅錫器五件を納れしめ、貨を積む巨萬雍髮を以て名と爲し、日出づれば刼を行ひ人を割いて手づから人の心肝を啖ふこと動もすれば百を以て計ふるのである。親戚朋友に遇ふと雖擇ぶ所莫つた。其の父鳴鹿は長厚（溫厚の長者）の人であつて、元吉が人を殺すを聞く毎に輙ち天を仰いで大に號んだ。元吉之を怒つて毒殺滋々甚しかつた。朱香、曾壽、趙五哈、百章等と部署を分ちて殺掠し、爲めに數十里内の草木を朱般（血の爲めに赤く染まること）ならしめた。時に城中主なく積屍丘を成した。惟だ三四の僧人被焚處（火葬場）において屋木を撤取し屍を聚めて之を焚き、民間の炊煙之が爲に斷絶した。忽ち婁東の浦嶠なる者が兵を率ひて至つた郭元なる者があつて街市の細民であつたが憤りに勝えないで、城に登り之を數めて曰く、浦六！我が嘉定と太倉とは一葦帶水の隔てのみである。然るに嘉定屠られて未だ十日を出でないのに、汝人面獸心公然來つて賊を爲し、剝取爨燼（追剝や放火を行ふこと）狗鼠も

汝が餘を食はないのである。汝速かに去れ、去らずんば將に汝を市に磔せむとすと嚇面を掩ふて反走し、歸りて成棟に愬へて曰く、嘉定はその嚚頑を恃み復た叛せむとすと。二十四日婁東の降將萬國昌等を遣はし、兵を卒ゐて葛隆鎮に至り織女廟に屯した。本鎮の劉敖王憲等衆を集めて千餘人を得た。乃ち牛を椎屠殺すること して共に盟ひ、反顧せざるを誓ふた。因て外岡鎮の鄉兵と會合し薛市門橋に扎營し、角を吹き鑼を鳴らし大砲を連發しつつ刀を挺て奮呼し、鋭に乘じて疾戰し、清兵少しく却いた。鄉兵奮死追擊且つ戰ひ且つ行いた。一人の清將があつて、その姓氏を失したが身の長八尺餘面色鐵の如く馬に乘じ陣を壓してゐた。偶々隊を失ひ 落伍すること 鄉兵朱六なる者道傍において溷 厠と同じ に登りつつあつたが、適々該清將の單騎其前を過ぐるを見、不意に突出して之を抱き因て共に河中に墮ちた。清將倉卒刀を拔かむとしたが未だ鞘を出づるに及ばずして朱六兩手を用ひて之を緊束し疾呼救ひを求めた。鄉兵喚聲の甚だ急なるを聞き反り視れば朱六が方さに清將と相搏つてゐて、双方水を濺

くこと濤山浪屋の如きであつた。衆大笑しつつ爭ひ水に下つて之を擒にし、立刻に梟斬した。その首極めて大幾ど五升入の槃のやうであつた。復た衆を鼓して急に追ひ南馬頭に及び復た大ひに戰ひ、共に七十二級の首を斬つた。鄉兵懽呼地を動かした。以爲らく此後は清兵正眼敢て葛隆鎭を覷はずと。遂に稍々懈散するに至つた。

二十六日五更清兵大ひに至つた。時に鄉兵未だ集らなかつた。惟だ孫小溪なる者の父子四人南橋を守つてゐた。小溪殺されて清兵鎭に入つた。居民尙未だ起なかつた。肆ままに屠戮を行ひ流血踝を沒した。勝に乘じ外岡鎭を屠つた。二十七日浦嶂等外岡、葛隆二鎭已に破れて道路梗塞なきを知り、且つ嘉定の初め屠らるや、存する者ありと雖勢ひ敢て抗せざるも然も剿絕せざれば後ち必ず變あらむを慮り、因て成棟を力說して再び城を屠らしめた。是の日嶂に逢ふ者は齠齔（齒のまだ拔け替らない童子のこと）をも尙留めなかつた。嶂既に縣治に據つて令を作し、自から念ふ我は本と婁東の人で嘉定を距ることが四十里に過きず、素と嘉定の人士と聲氣相通じてゐたので、刑殺に

非らずんば以て威を示す無しと。是において乎邑諸生朱衷恂が髪を留むるの故を以て東門に梟首せられた。諸生婁復聞なる者は嶂の友であつたが、南門外において縛せられしも尚ほ嶂の字を呼びて曰く、浦君屏は我が好友我を釋せば厚く報ゆべしと語未だ口を脱せざるにその妻子及娣及外甥を並せて悉く斬首し婁氏の血脈遂に斷絶した。遺民足を重ねて立つた（相蹂躙して逃げ去つた）嶂乃ち意を安んじて志を肆にし、兵を發して村落に入つて打糧（食糧徵發）し、郷里の男婦は悉く亂草を以て頭に蒙り水中に伏し以て害を避けた。蓋し附近の數十里間寧居する者は一人も莫つた。嶂日夜その郷里の兵丁と共に財帛を分ち、並びに木棉物や、器具等を括取して（一括すること）婁東に滿載した。是において邑中の貧富悉く盡きた。未だ年を踰へざるに清の部院廉なる者嶂が罪を知り之を郡獄に下して笞を受くること無數、旋（やが）て誅に伏した。嗚呼孰れか天道迂なりと謂ふ哉。

初め成棟の吳淞に至るや、明の百戸（世襲の武官）哈伯章首として軍器火藥の三科（しな）を献じ武

舉人馮嘉猷は吳淞遠近の地形、本所攻圍守禦の法を献じた。成棟松江府を攻むるに及び、嘉猷を以て吳淞總鎮の事を處置せしめた。嘉猷地方において寛貸する所が多かつたので遠近の百姓は甚だ之に倚つた。惟だ徐元吉茶毒を肆ままにすること甚しく、嘉猷反つて之を憚つてゐた。原任陞營の把總吳之蕃なる者はその父斗南崇禎の朝（乃ち穀宗の世）において命を奉じて海賊を討じて事に死した。故を以て之蕃常に自ら謂ふ忠義の名門であると。然るにその手下の百戸の降るを聞くや怒つて曰く、奴輩皆世襲の武職であるに降ること何ぞ容易なる、大明の兵汝を得るを俟ちて定めて當さに汝の眠を抉ぐり、汝の腹を剖き汝の筋を鑿り、汝の骨を抽くべし。今日あるを且つ喜ぶ莫れと。

八月十六日把總吳之蕃兵を江東に起し獲へられて之に死した。

之蕃江東において兵を起し吳項橋に至つて岸に登つた。嘉猷報を聞き充營の兵を聚め慟泣して曰く、汝曹之蕃が前日の語を聞けるや、猝かに不利なるあれば我汝と皆

首を砕かれむと、志營の兵踴躍して命を用いた。先づ人を遣り之蕃の舟を焚いた。之蕃の兵は皆烏合の衆である。火の起るを見て一時に潰散した。之蕃亡ぐる者數人を連りに殺したのであつたが遂に定むることが不可能であつた。乃ち天を呼んで哭して曰く、我が父子並に王事に死するは分也、恨む所は必力彈き盡きて義師を起すことが出來ず、未だ戰はずして潰ゆ、我が目瞑する能はずと。是において槍を挺して赴き鬪死せむと欲した。居民汪三なる者素と與に相識つてゐたが、好言を以て之を誘ひ陰かに竄取（生擒と同意）せむことを謀つた。之蕃素より伉直にして疑は莫つた。與に同行して水の榜らに至るや汪三忽ち之を推して水に墮し爲めに擒にせられた。嘉獻の兵之蕃及びその父祖の名を呼びて大いに罵り、得る所の首級を以て其の項に懸け困辱萬端した。嘉獻大いに鼓吹を陳ね、花紅羊酒（赤葡萄酒）を取つて、勝を得たる兵を犒ひ、卽ちその地において之蕃を縛して陷車（婢人を載せる車）に推し入れ、競ひ指し罵つて曰く與之蕃、汝は本と吳淞の牧兒、僥倖にして一官を得るも、何ぞ指數するに足らむや

敢て此事を作す豈福を沒するに非らずや。之蕃大ひに笑ひ罵つて曰く、奴輩は福を得ると謂ふも、我は家門を滅する久しからざるを懼るるもので是れ乃ち禍であると徐元吉目を瞋らして之を顧みた。之蕃復た罵つて曰く。我は朝廷の世臣で父子忠節を世々にしてゐる。汝曹逆賊は狗彘も食はざる所、何ぞ敢て面目を以て人に向はむやと元吉糞穢を以て其口を塞いだが、之蕃唾して復た大いに罵つた。郡城に解押送し て之を殺した。是より遠近薙髪して『大清順民』と稱した。是の役や城の内外死する者二萬餘人、縉紳には則ち侯峒曾、黄淳耀、龔用圓があり、孝廉には則ち張錫眉貢士には則ち王雲程があり、青衿には則ち黄淵耀等七十八人許りがあつた。其の時孝子、慈孫、貞夫、烈婦、才子、佳人等の横まに鋒鏑に罹りしものは勝て計ふ可からざる程であつた。縣を設けて以來實に絶無僅有の異變であつた。予や寃酷寃枉殘酷を目擊して記なきに忍びないのである。事や必ずや灼(てら)し見るに非らずんば敢て一語を增飾しないのである。間々風聞に渉るものあるも亦必ず耆舊先輩故舊を尋訪し衆に相符

合して然る後之を簡に筆す。後の世の弔古の士にして寃魂を悽風慘月の下に哭する有らむ乎、庶幾くは以て信を考ふることを得むかな。

〔註一〕 錢謙益　字は受之、牧高と號し清初の詩人を以て其名を識らる。江南常熟の人。明の時禮部尚書と爲る。清師江南を定むるに及びて出でて降る。禮部侍郎を以て祕書院學士のことを管掌し、尋で歸を乞ひ里居十六年その詩は杜小陵を宗とし、韓白蘇陸元虞諸子に出入し才力尤も富健なり、康熙三年年八十三を以て卒す。

〔註二〕 吳志葵　明末治世嘉定城の總兵（少將格）たり。清兵南下するに及ひ吳淞水陸總師と爲り令を近縣に傳ふ。清兵大擧して嘉定城に向ふや嗣曾師を志葵に乞ふ。志葵乃ち游擊蔡喬（一に祥に造る）を遣はし兵三百人を以て赴援し一戰にして破れ喬は戰死し餘衆潰ゆ。志葵後ちに陣沒す。

〔註三〕 李成棟　遂陽の人。初め明に事ふ、明亡び清に降る。明兵を南淮の上海に戮し功を以て吳淞總兵官を授けらる。後ちに叛し清の軍掩むや。成棟の馬蹶き水に墜ちて死す。

〔註四〕 黃淳耀—淵耀　黃淳耀字は蘊生陶菴と號す。幼より學を好み、性中和湛靜、喜怒色に形はれず。古今の忠孝名節を談ずるに至れば則ち持論侃々少しも假借せず。崇禎癸未の進士に登る天下已に亂れ而も人猶ほ私を營んで已まざるを見、詩を賦して南歸した。明亡びて皇裔弘光立つも謁せず。清の大兵嘉定城を圍むや乃父嗣曾を佐けて兵食を調し、城破れて弟淵耀と嘉定城外の僧庵に縊死す年四十一。黃淵耀　字は偉恭、邑諸生、己を律すること嚴格その兄淳耀と相師友として講誦輟まず、是に至て怡然として死に就く。

〔註五〕 侯峒曾 字は豫瞻、嘉定縣の人。給事中侯震暘の子也。福王の時用ひられて左通政と爲りたるも辭して任に就かず。南京陷るに及び縣多く兵を起して自から保てり。嘉定の士民は峒曾を推して盟主と爲し、里人黃淳耀、張錫眉、龔用圓、馬元調、唐全呂、夏雲鮫等と死を誓ひ固く守るも、力竭き淵に赴いて死す。

〔註六〕 葛麟 丹陽の人。膂力あり貌武夫に類す。弘光立ち便宜十二條を上り、又兵を江北に練らむことを請ふ皆報ぜられず。京口破れ總兵吳志葵と兵を起して青浦を復し、志葵破れて擒にせられ潰卒歸する所無し、麟を推して帥と爲す。麟乃ち舟を引いて太湖に入り王期昇と合す。盧象觀も亦至る軍遂に盛なりき。期昇兵威を以て隣境を肆掠す、民其暴に苦しみ大兵を引いて期昇の舟を焚く、昇觀も亦危殆に瀕す、麟之を救ひ六七十人を斬殺し遂に水に赴いて死す。

〔註七〕 刑大大 は高傑の妻刑氏のことなり。子元爵を率ゐて恤を請ふ。弘光所部の將士に命じ刑氏の統轄を許す。刑氏趨武多智軍資を掌る。將士固と刑氏に服從す。元爵の降るや復た揚城に入る皆刑氏の爲す所、故に刑大大に隨ふて降ると稱す。傑が軍諸鎮に於て强しと爲す。此時成棟に屬して此に在り。尙詳細は揚州十日記の 〔註二〕 高傑の條を參照せよ。

嘉定屠城紀略 終

大正拾貳年八月四日印刷
大正拾貳年八月八日發行

揚州十日記
嘉定屠城紀略
定價金壹圓也

復製
揚州十日記
嘉定屠城紀略
不許

譯者　宮崎八百吉
發行者　前田德藏
東京市芝區源助町拾貳番地
印刷者　東野光一郎
東京市京橋區弓町拾參番地
印刷所
千代田印刷株式會社

發行所
東京市芝區源助町拾貳番地
電話芝四壹貳六番
振替口座東京四參九〇四番
廣文館

發行以來好評嘖々の名著

第一高等學校教頭 文學博士 齋藤阿具氏著

ヅーフと日本

菊版總布表裝 上製函入全一册 正價金貳圓五拾錢 送料金拾五錢

法學士 藤本直氏譯 アントン・メンガー博士著

新道德學

四六版總布表裝 上製函入全一册 正價金壹圓五拾錢 送料金拾貳錢

法學士 藤本直氏譯 アントン・メンガー博士著

民衆政策

四六版總布表裝 上製函入全一册 正價金壹圓五拾錢 送料金拾貳錢

山形高等學校教授 文學士 北島葭江氏譯 ロバート・ジヨンス博士著

個人及國家新論

四六版總布表裝 上製函入全一册 正價金貳圓也 送料金拾五錢

法學士 石濱知行氏譯 ボルヒト博士著

國民經濟政策

四六版總布表裝 上製函入全一册 正價金壹圓五拾錢 送料金拾貳錢

小寺謙吉氏譯 アーサー・ポンソンビー著

國民的外交

四六版總布表裝 上製函入全一册 正價金貳圓八拾錢 送料金拾五錢

東京市芝區源助町拾貳番地
振替口座東京四參九〇四番

廣文館

發行以來好評嘖々の名著

東京帝國大學助教授法學士 蠟山政道氏譯 シユテイア・ソムロウ博士著

政治學

四六版總布裝製 上製函入全一册 正價金貳圓五拾錢 送料金拾五錢

小寺謙吉氏譯 サー・フレリツク・ポロツク博士著

政治學史大綱

四六版總布裝製 上製函入全一册 正價金壹圓八拾錢 送料金拾五錢

法學士 藤本直氏譯 ヘルマン・レーム博士著

國家學

四六版總布裝製 上製函入全一册 正價金貳圓也 送料金拾五錢

小寺謙吉氏譯 エドガー・ハムモンド著

英國憲法要論

四六版總布裝製 上製函入全一册 正價金壹圓五拾錢 送料金拾貳錢

マスター・オブ・アーツ 大石熊吉氏譯 コーウキン博士著

米國憲法要論

四六版總布裝製 上製函入全一册 正價金壹圓五拾錢 送料金拾貳錢

法學士 池善一氏譯 アルフレッド・コルン博士著

獨逸新憲法要論

四六版總布裝製 上製函入全一册 正價金壹圓八拾錢 送料金拾五錢

東京市芝區源助町拾貳番地 振替口座東京四九〇四番

廣文館

發行以來好評嘖々の名著

京都帝國大學教授 文學士 宮田一氏譯 ジョン・マクカン博士著
公民倫理
四六版總布表裝 上製函入全一册 正價金貳圓五拾錢 送料金拾五錢

山形高等學校教授 文學士 北島葭江氏譯 ソーレイ著
道德生活と道德價値
四六版總布表裝 上製函入全一册 正價金壹圓五拾錢 送料金拾貳錢

マスター・オブ・アーツ 大石熊吉氏譯 アイ・ブラウン著
民主主義の意義
四六版總布表裝 上製函入全一册 正價金壹圓五拾錢 送料金拾貳錢

小寺謙吉氏譯 エス・ラフエティー著
政黨政治の將來
四六版總布表裝 上製函入全一册 正價金壹圓八拾錢 送料金拾五錢

マスター・オブ・アーツ 大石熊吉氏譯 ギッデキングス博士著
國家の權義
政治・社會研究叢書 第貳編 正價金八拾錢 送料金拾壹錢

マスター・オブ・アーツ 大石熊吉氏譯 ウキリアムス博士著
主權と階級鬪爭
政治・社會研究叢書 第參編 正價金六拾錢 送料金拾壹錢

東京市芝區源助町拾貳番地
振替口座東京四參九〇四番
廣文館

514
158